

WHO指定研究協力センターセミナー報告書

# 発達障害の理解と就労支援

—自閉症スペクトラムを中心として—



2008年3月2日（日）



国立身体障害者リハビリテーションセンター

障害の予防とリハビリテーションに関するWHO指定研究協力センター

## プログラム

日 時 2008年3月2日(日) 13:00~16:30

場 所 国立身体障害者リハビリテーションセンター学院講堂

総合司会 中島八十一

国立身体障害者リハビリテーションセンター学院長

13:00-13:10 開会挨拶 岩谷 力  
国立身体障害者リハビリテーションセンター総長

13:15-14:00 講演「自閉症者の長所と関心を生かした教育と交流による  
就労支援のすすめー当時者の立場からー」  
Dr. Stephen Shore  
ニューイングランド アスペルガー協会名誉会長  
全米自閉症協会役員

14:00-14:10 休憩

14:10-16:10 パネルディスカッション  
司会 深津玲子 国立身体障害者リハビリテーション  
センター病院 医療相談開発部長  
北村弥生 同センター研究所 障害福祉研究部研究員

14:10-15:22 パネリストからの発言

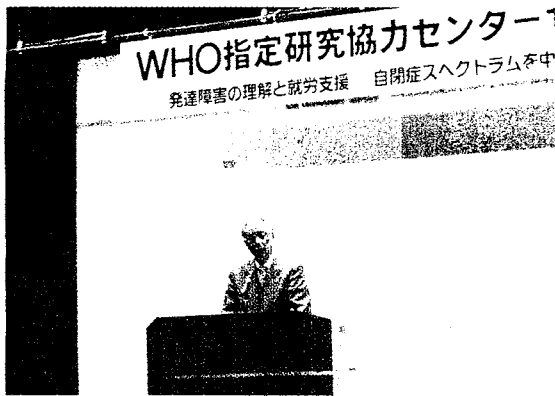
- ① 「発達障害者支援法について」  
日詰正文氏 厚生労働省 精神・障害保健課  
発達障害対策専門官
- ② 「発達障害者への就労支援の取り組み」  
市川浩樹氏 厚生労働省 障害者雇用対策課  
障害者雇用専門官
- ③ 「一貫した療育的支援の構築」  
吉野邦夫氏 (福)西多摩療育支援センター施設長
- ④ 「アスペルガー、高機能自閉症者の就労について」  
須田初枝氏 日本自閉症協会副会長  
(福) けやきの郷理事長
- ⑤ 「自助グループ」  
民田森夫氏 精神保健福祉士、発達障害当事者

⑥ 「自閉症スペクトラム障害の医学的診断治療と支援」  
加我牧子氏 国立精神・神経センター精神保健研究所長

15:25-15:55 ディスカッション Dr. Stephen Shore が参加して

15:55-16:10 質疑応答

16:20-16:30 閉会挨拶 江藤文夫  
国立身体障害者リハビリテーションセンター  
更生訓練所長



開会挨拶 岩谷 力 総長



閉会挨拶 江藤 文夫 更生訓練所長



総合司会 中島 八十一 学院長



講演 スティーブン・ショア 氏



パネルディスカッション

## 目 次

開会挨拶 .....	1
自閉症者の長所と関心を活かした教育と交流による就労支援のすすめ — 当時者の立場から — .....	5
Stephen Shore	
発達障害者支援法について .....	21
日詰 正文	
発達障害者への就労支援の取り組み .....	23
市川 浩樹	
一貫した療育的支援の構築 .....	26
吉野 邦夫	
アスペルガー、高機能自閉症者の就労について .....	30
須田 初枝	
自助グループ .....	34
民田 森夫	
自閉症スペクトラム障害の医学的診断治療と支援 .....	38
加我 牧子	
パネルディスカッション .....	47
閉会挨拶 .....	65

## 開会挨拶

岩谷 力

国立身体障害者リハビリテーションセンター 総長

ご来場の皆様ようこそ、国立身体障害者リハビリテーションセンターセミナー、WHO 指定研究協力センターセミナーにご参加くださいます。ありがとうございます。

本日はアメリカからご高名なスティーブン・ショア先生をお迎えいたしまして、わが国の発達障害の当事者、医療・療育・就労・行政の関係者の方々のご参加を受け、発達障害を持つ方々の就労に関するセミナーを開催できますことは、私どもの大変大きな喜びです。

私どもは数年来、障害を持つ人々の医学的リハビリテーション、自立生活、就労支援などに関する国際セミナーを開催してまいりました。昨年は、国連総会において、障害者権利条約が採択されましたことに合わせ「障害者権利条約とインクルーシブ・ソサエティの実現」というセミナーを開催いたしました。

今年は、2005年に施行されました発達障害者支援法を受け、私どもが昨年4月から取り組んできました、青年期の発達障害者に対する就労支援体制等の確立に関する研究に関連し、本セミナーを開催いたします。

2002年に作成されましたわが国の「障害者基本計画」において、わが国は障害の有る無しにかかわらず、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し合う共生社会をつくるということを目指しています。共生とは、英語では *living in close physical association* と訳されますが、生物学的には *symbiosis* といい、子孫を残すために、異質の者同士が何らかのかたちで一緒に生きる関係とされます。今日の私たちの社会は、違いを違いとして認め合って、一緒に生きるという、多文化主義の社会を目指しております。

障害を持つ人々と、障害を持たない人との間の違いは、固有の心身機能、すなわち感じ方や考え方、行動の仕方の違いがあるということに起因しております。その違いが社会のバリアーとの関係の中で、障害のある人たちにとって不自由さとなっているということとして、とらえられる時代になっております。

共生するためには、その違いを理解し、お互いの共通部分を拡大することが最初に行われなければなりません。どのようにして、その共通部分を増やしても、固有の心身機能を同化することは、極めて困難です。共生社会というのは、*corporative society* と

か inclusive society とか言われますが、それは同化とか融合を越えた、多文化社会であると思います。

歴史を振り返ってみますと、障害を持つ人々は社会の生存競争の敗者として切り捨てられた時代、そして機能の回復・向上によって、健常者との同化や融合を図るといった時代を経て、違いを違いとして認め合って、社会の対等な構成員として共に生きるという時代を迎えています。

共生社会というのは、違いを認め合うだけではなく、違いを多様性として発展させていく、より多様性に富んだ社会をつくることでありましょう。私たちが障害の有無を乗り越えて共生社会を築くためには、互いを理解し共通性を拡大するだけでは、同化または融合の段階にとどまって、共生社会に達することは難しいのではないのでしょうか。

障害を持つ人々と持たない人たちとの間の、共通性を拡大するにとどまらず、それぞれの固有性を伸ばし多様性を拡大するというのが、より豊かな、文化的な社会をつくっていくことになろうと思います。

このようなことを申し上げても、現実には違いに苦しむ人たちが満ちております。本日のセミナーでは、そのような厳しい現実を改めて目の当たりにする、思い知ることになるかもしれません。しかし、皆様のご参加により、このセミナーが活発な討論をされることによって、発達障害を持つ方々を理解し、就労を支援する社会の仕組みを発展させることに役立つことを願いますとともに、より高い理想を考える機会となることを希望いたします。

長くなりましたけれども、これで私のご挨拶とさせていただきます。

講 演



## 自閉症者の長所と関心を生かした教育と交流による就労支援のすすめ

### —当事者の立場から—

スティーブン・ショア

ニューイングランド アスペルガー協会名誉会長、全米自閉症協会役員

皆様こんにちは。私がこのようなかたちで皆様にお話しできることは、大きな光栄でございます。関係者の皆様、今回は私を呼んでいただきまして、自閉症スペクトラムの当事者の雇用に関する経験を語らせていただきまして、ありがとうございます。

仕事というのは、単に生活の糧を得るだけの目的ではありません。一番いい意味では、人生、生活に意味を持たせるのが仕事です。我々全員が仕事を求めています。特に自分が関心のある領域・分野で仕事をしたい。もし関心があれば、たぶん上手にできるでしょう。テンプル・グランディン、たぶん自閉症の当事者で一番有名な方だと思いますが、彼女は「自分の人生を考えてみたら、知的に満足のいく仕事もしなかったらば、生きる価値はないだろう」と言っています。

テンプル・グランディン、彼女の強さの一つは、食肉加工です。アメリカに行き、牛肉を食べる場合、たぶん50%以上の確率で、あなたの食べた牛肉は、彼女が設計した食肉加工工場の設備で加工されたもののはずです。職を見つめる、そのときに自分の好きなもの、そして強さにマッチしたものが見つければラッキーです。

自閉症スペクトラムの人には、それぞれ違いがあります。そして自閉症のスペクトラムはどうなっているかということ、実はかなり失業率、不完全雇用が多く、これを合わせますと、少なくとも90%ということです。これは英国の全英自閉症協会の統計です。

したがって、この自閉症スペクトラムの人のうちの10%未満しか、我々の強みと関心にマッチした仕事を持っていないということになります。しかし、適切な支援を得ることによって、自閉症の人々は、非常に生産性の高い仕事を見つけることができるはずで、そして雇用を得ることができるはずで、

我々の仕事は、この予後を変えるということです。自閉症の我々が、仕事という世界に対応できるように準備する必要があります。同時に、労働の世界を教育すること。そして、型にはまらない考え方をすることです。どうやったら、この自閉症を持つ

人々のために仕事を見つけることができるのか。そして、その延長として、ほかの障害を持った人も含めてです。

したがって、これを障害と捉えるのではなく、前にも指摘がありましたけれども「違い」と捉えるべきだと思います。自閉症というのは「違うあり方」ということです。必ずしも障害のあるあり方ではありません。

いろいろな自閉症の状態として、障害につながるものもあるかもしれません。自閉症の人で、信頼できるかたちでコミュニケーションができなかったら、これは障害をきたすかもしれない。何か手を打つ必要があるかもしれない。あるいは、消化の問題があって、非常に痛みが多く、仕事をしたくても、あるいは学習したくても、集中できないという人もいるかもしれません。

まず私のことをお話しさせていただきます。最初はかなり典型的でした。2時間の分娩時間、そしてアプガー・スコアの9。これは私の生後24時間の私の写真ですが、私のワイフに「卵のように見える」と言われます。最初の18カ月は経過良好でした。そしていきなりのように、その時点で自閉症という龍におそわれました。

龍は火を吐いて、私はコミュニケーションができなくなりました。かんしゃくを起こすようになった。自己刺激的な活動にかかるようになった。そして、引きこもるようになった。自虐的な行動を起こすようになったということでした。かなり自閉症だったということです。これは18カ月に始まりました。

その当時、両親はどうしていいか分からなかった。これは1960年代中盤でした。その時代は誰に聞いても、どうしていいか分からなかった。この自閉症の発症率というのは、1万人に1人とされていました。しかし、今では10年ぐらいの間、この発症率が上がってきています。アメリカのCDCによりますと、今では発症率は、150人に1人と報告されています。これはかなり自閉があるということです。

なぜここまで増えてきたのでしょうか。たくさん疑問点があります。いろんな質問が投げかけられていますが、まだはっきりとした答えは分かりません。もしかしたら診断学が進んだから。そしてこの特徴に基づいてのカテゴリー分けが、うまくなったのかもしれません。ワクチンということを言う人もいます。食事のせいだと言う人もいます。あるいは、環境がかかわっているのではないかと指摘する人もいます。

専門家によりますと、自閉症というのは、遺伝的な素因があり、そこから始まって、一つあるいは複数の他の因子、カテゴリーにより刺激されるということです。

一つ分かっているのは、自閉症がこれからもこのようなペースで増加していけば、たぶん次の世代には状況が逆転するでしょう。自閉症スペクトラムでない人の雇用をどうするかという話を、していることになると思います。

自閉症当事者は多いです。私は公立の学校に通っておりましたが、覚えている限り、自閉症の子どもというのは私だけでした。でも今では、私はボストンに住んでおりますが、約15マイル圏内に五つの学校があります。これは専門の学校です。ボストン東スクールというのが、自閉症の最大の学校なんですが、これは武蔵野東学園の姉妹校です。

ボストンには189人の学生がいます。また、ほかの学校には89名の自閉症の生徒がいます。ほかにも学校があります。パブリックスクールの中でも、特にPDD（広汎性発達障害）の子どもたちを受け入れているところがあります。

その当時、両親は診断をしてくれるところを探していました。まだ情報が欠落していました。その当時というのは、まずその両親が責められていた。特に母親のせいだということがよく言われていました。母親が原因で、子どもにダメージを与えてしまった。これはさまざまな心理学的な精神的な理由で。そして子どもを拒絶して、そしてその子どもが今度は環境を拒絶するようになったと、言われていたんです。

けれどもこれは誤っているということが分かりました。もう今は、そういうことは言っていないです。でもまだ、精神科医その他のメンタルヘルスのプロフェッショナルが関わっています。なぜならば、自閉症の多くの側面において、二次的な精神的な、あるいは心理的なチャレンジ（課題）があるからです。

考えてみますと、誰でも自閉症の人々が経験している多くの経験を持ち、しかしながら、よい人間関係を確立しようとして、いろいろな困難に対応すれば、やはりうつにもなるかもしれない。こういった中で、どうやったらこれに対応できるかを理解するということが、非常に有益だと思います。

私は診断を受けました。非常に強い自閉傾向が出ているということで、癩癩を起こす、言語をうまく話すことができない。そこで、このプロフェッショナルに言わせると「こんな重症は見たことがない」ということで、施設を勧められました。しかし両親が、子どものために擁護してくれた。そしてうちの両親は、自分たちで育てることになってくれたのです。

そして、今やっている家庭ベースの早期介入プログラムを開始しました。音楽、動き、感覚統合、そしてナレーション、模倣。こういった訓練をまずうちで受けました。振り返

ってみれば、発達的な、例えばニューロメソッドのような、あるいはフロアタイムや RDI のようなアプローチに似ていると思います。

私は非常に恵まれていました。なぜならば、うちの両親は、私が何を必要としているか分かっていたのです。それが、私がこの博士号の研究をするベースになりました。その子どものニーズに一番マッチした対応をしなくてはいけないということで、これが最も重要な考慮点です。我々は自閉症の子どもたちを、そういったかたちで助けています。

4 歳ぐらいになりますと、話すことができるようになります。最初私を受け入れてくれなかった学校に入れるようになります。そして診断のほうは、サイコティックからニューロティックにアップグレードされました。したがって、いろいろと進展があったわけです。

5 歳ぐらいになりますと、言語能力はほぼ正常になりましたけれども、ほかの課題はたくさん残っていました。まず、公共の幼稚園というのはとても難しかった。どうやってほかの子どもたちと付き合うか分からなかったし、みんなも分かってくれなかった。たくさんいじめられました。そして、からかわれた。そして先生たちも対応が分からなかった。読み書きや算数も 1 年ぐらい遅れていました。

小学校では、机に座って自分の好きなテーマの本を読んでいた。地質学、地理や電気のこと、恐竜のことなどのテーマの本を読んでいた。でも学校で、もっとほかのこともできるかと思いきや、私はとてもハッピーでした。例えばグループで読書することもできたわけです。

先生たちは私に接する方法を知らなかった。私は行動上問題のある子どもではなかったのです。放っておいてくれて、それがいいか悪いかは別として、私が好きなことをさせてくれたということです。たぶんこれは良かったことだと思います。

確かこのころ、3 年生ぐらいになったときに、天文学の本がたくさん私の机の上に重なっていました。そして私は、算数は学ばなかったけれども、十分数学能力があつて学習ができたので、大学レベルで統計学は教えることができます。それ以上はもう学びませんでした。

幸い、教師はこういったたぐいのスペシャル・インタレスト、特別の関心というのを見いだしてくれました。その子の強み、どういう力があるか、情熱というのを見いだしてくれることができます。天文学なら、この子は集中ができるということで、それを読み書きや算数に結び付けてくれるようになります。この時点で、必要な勉強につなげてくれる

ようになりました。

私が最初に仕事をしたのは、新聞配達から始めました。これはまだ小学生の9歳ぐらいのときに、アルバイトで新聞配達をしました。これが最初の私のビジネスでした。とてもうまくいきました。これはいわば自営業でした。新聞をまとめて、自転車のかごに入れて、近所を回って新聞を配りました。これはうまくいきました。

そして中学生になりました。中学生になって年がいったので、もっと正式な環境で仕事をするようになりました。まずあるレストランでウェーター助手になりました。最初のうちはうまくできると思ったんですが、しかし、感覚的に刺激が多すぎて問題になってしまいました。非常にうるさい、多忙なレストランでは働くことができなくなってしまった。そしてシャットダウンモードになり、非常に緩慢な動作になってしまって、仕事ができなくなって失業しました。

次の仕事は、もっと私に関心のある特別な分野、私の情熱にかかわっている分野でした。それは自転車でした。確か、私のうちには14台自転車があったと思います。これのほうはずっとうまくいきました。なぜならば、自分の関心がある領域にフォーカスを当てることができましたからです。しかも刺激レベルは低かったんです。自転車屋さんのガレージで働いていました。これはやはり私の特別な関心にフォーカスが当てられていて、うまく仕事ことができました。

したがって我々は、自閉症スペクトラムの人の、何が特別な関心かということが理解できなくてははいけません。そして、極端なことがあるということ。大抵我々の場合には、対応できる。最初は何か気に入らない仕事であっても、そのうち慣れるということです。そのうちに慣れていき、その仕事をやらなくなっても、楽しむ方法が見いだせるということです。それが自閉症の場合には、うまくいかないこともあります。したがってこの特別な関心と雇用をうまく結び付ける必要があります。

もう一つ、(型どおりの考え方をしないで) 考えなくてはいけないのは、どうやって自閉症スペクトラムの人に、仕事を探すことができるのかということです。それに関しましては、ドクター・グランディンの話に戻りますが、ポートフォリオを使うという方法があります。ポートフォリオは何かというと、その人が今までこなしてきた仕事のサンプル、リストです。

私は自転車の修理の仕事を前にしていたわけですが、私はその当時気が付かなかっただけでも、ポートフォリオを使っていました。自分が組み立てた自転車に乗っていたんです。

スポーク、ハブ、リムも全部自分で組み立てたんです。そして最後のボールベアリングまで、全部自分で組み立てて、そしてこれに乗って自転車屋さんに行って、店長と話したんです。

そして自分の自転車を見せて、そのことを話したんです。そうしたら店長さんはとても気に入って、関心を示してくれて、仕事をくれたんです。そのときには店長さんには分かっていたんです。私を雇いたいと思ったのです。自転車の修理ができると分かって。

普通仕事を探す際には、求職活動では面接を受けます。しかし、自閉症スペクトラムの我々としては、面接というのはとても大変なことです。かなりの社会的な相互作用が必要であって、これは自閉症ではとても難しいんです。一つは、目線を合わせなくてははいけない。まず面接者ときちんと、適切なかたちで目線を合わせる必要があります。これは自閉症スペクトラムの人にとっては難しいんです。

でも自閉症の人が「目線を合わせなくてははいけない」と言われたら、今度はそればかりします。ずっと相手の目を見つづけて、今度は目線をそらせなくなる。そうではなくて、その人の目を見たり、鼻を見たり、額を見たり、ほかを見たり、そしてまた戻ってくるというのが普通なんですけれど。

しかしながら自閉症の当事者というのは、そういったタイプのアイコンタクトを学習することはできます。近いことはできます。観察から学ぶというよりも、指示を受ければできるということです。このような行動が、面接・面談では期待される。そして自閉症の人が、そういった行動をうまくできないというところがどうしてもありますので、なかなか仕事が決まらないということです。

アメリカのある研究によりますと、雇用における成功の第一の鍵、成功要因は何かと思ったら、この社会的な相互作用だということです。ソーシャル・インタラクションです。もちろんその仕事自体がうまくできるということも重要ですけども、ほかの人がどのように理解しているのか、何を期待しているかということが分からなくてははいけない。これは我々にとってチャレンジです。そしてこれができなかったら、面接に行くことすらできません。

この自転車の仕事は、非常にうまくいきました。これは中学生の間ずっと続けまして、高校でも続けて、大学でも続けました。自転車を修理して、大学の学部の学費を稼いでいました。これも私にとっては、とてもうまくいきました。

次に大学の話です。大学というのは、自閉症スペクトラムの人にとって、とてもいいと

ころになりうるところです。非常に自由な雰囲気です。たくさん友人がいました。例えば真夜中に自転車に乗りたかったら、私と同じぐらい変な人がいくらでもいて、一緒に乗ってくれました。大学で私のワイフにも会いました。これは特に音楽に対して、二人とも強い関心があったからなんです。そして結婚して我々、ほぼ18年になります。

もっと私自身のことを、そして私のワイフ、そして母親もこの本の執筆にかかわってくれておりますが、もっと知りたかったら日本語版にもなっております『壁の向こうへ』(学研)という本を読んでいただければと思います。

そして博士号の論文も書きまして、それは、特に自閉症スペクトラムの子どもたちのニーズに一番マッチした実践についての論文です。いろいろアプローチが取られております。行動分析であるとか、いろいろな努力がされておりますが、何しろこのスペクトラムというのは、非常に多種多様な広い状態です。

繰り返しますが、自閉症スペクトラムは必ずしも障害とは限りません。いろいろなかたちということで、同じ自閉症スペクトラムであっても、あまりにも多種多様であるので、個別に対応が必要になります。その人によってニーズは違うからです。

自閉症に関してですが、自閉症というのは、よく言われるのはスペクトラムだということです。我々は今ではそういうとらえ方をしています。スタートとしては、いい捉え方だと思います。片や重度の自閉症があります。社会の大半は、自閉症を次のように捉えているわけです。小さい子がかんしゃくを起こして、壁に何回もぶつかってということをする、そして話さないという印象なんです。

これが直接、雇用と関連してきます。こういった子どもたちが15年、17年後にどうなるのかということを考えなくてはなりません。どうなるかということ、自閉症を持つ大人になるのです。発症率が上がっている、特に15歳、17歳のところでそれが顕著に認められます。すなわち150人に1人というバブルですが、ほぼ1世代前に始まっています。

その当時子どもだった人たちが、大人になって学校を出て、そして今、社会に進出しています。ここで重要なのは、どのようなサポートが必要か。そして雇用を見つけることができるか、住宅を見つけることができるか。そして全般的に、生産的な満足のいく生活ができるかということです。

今度はスペクトラムの右側です。こちらはアスペルガー症候群、高機能自閉症です。このスペクトラム全体でいうのは、二重の例外ということです。自閉症の人々には大きな難問もあるけれども、非常に強い強みもある、力もあるということなんです。このチャレン

ジ自体が強みにもなります。我々は弱み、強みは誰でもあるわけです。ある人のことを考えてみれば、いいところがあって、弱みがあって、こっちは強くてと。これは誰でもいえることです。

ただ、我々のような自閉症スペクトラムの場合には、地下室まで下がってしまうのです。しかしそれに対応して、その分だけかなり強い部分は、天井を突きぬけるほど高いわけです。こういう人が、どうやって充実した生活をすることができるか。そして雇用を得ることができるかということになります。どういったサポートが必要かということです。

この二重の例外に関してですが、カシエーン・シブリーという友人がいます。25歳の女性で、自閉症の当事者です。彼女が私の2冊目の本『自閉症スペクトラム生き方ガイド』の著者の一人になってくれました。非常にいい章を書いてくれています。

彼女は言語知能数が非常に高く、200以上なんです。知能テストというのは200までいきませんから、これは推測で言っているんですけど。非常にすぐれた読み書きのできる人です。話すことも上手だし、書き物も上手で社会に大いなる貢献をしています。しかしながら、社会的な相互関係、対人関係には弱い。そして学習障害も非常に強いです。そして25項目の食事療法をやっている、それ以外の食事となりますと、もう大騒ぎです、大変です。

この人を高機能自閉症と見る人もいるし、ある人は軽度、自閉症と見るわけなんです。ここで知りたいのは、軽度自閉症というのはどういうことかということです。彼女の場合であっても、普通の人ができるような仕事を見つけることはできません。これだけ困難な課題があるからです。

これは何を意味しているかということ、自閉症スペクトラムは、どこにいる人でもヘルプが必要だということです。アスペルガーの人は数学が優れているかもしれない。ほかのことも非常に優れているかもしれない。特定の仕事はうまくできるかもしれない。にもかかわらず、やはり支援は必要であるということです。社会的相互作用、その他の領域においてサポートが必要で、そのサポートさえ得られれば、我々としてもこの仕事の世界に大きな貢献ができる。これははっきりと言えます。

この小さな円が、私自身自閉症スペクトラムでどこに着地したかということを示しております。生後18カ月で自閉症の龍が火を吐いて、コミュニケーションができなかったところから始まりました。

雇用の話に戻ります。ここで重要な考慮点として、その人の性格あるいは特徴というの



があります。その人の強みと興味は何かということです。

英国のパディントン駅で働いている男の人がいます。彼は、高機能自閉症です。そして迷子になった人を駅で案内するという仕事をしています。言葉で話してあげなくてはいけません。質問されたときに説明しなくてはいけません。

彼のコミュニケーションは直接的で、事実を話す傾向があります。こういう直接的な私たちで、自分が迷子になったときに、情報がほしいでしょうか。あるいは冗談を交えて、いろいろな例え話をして説明を受けたいですか？コミュニケーションスタイルは、彼の場合は非常にプラスになったのです。

もう一つ雇用の状況として、別の部分があります。彼がどこから情報を得るのかということです。彼の同僚の場合には、同じ仕事をしていても、マニュアル、コンピュータから情報を持ってきます。彼の場合には、この情報をすべて暗記しています。なぜならば、公共交通機関というのは、大ロンドンにおいては、彼の最も得意とする強い分野で、強い関心があるからです。その結果として、彼の仕事はほかの誰と比べてもずっと早く、迅速に対応できています。これも一つの例だと思います。

自閉症の特徴を、別の観点から見るとということです。自閉症の特徴となりますと、コミュニケーションの難しさ、社会的な相互作用の難しさ、関心が限定される、反復的な動き等がありますが、コミュニケーションスタイルはどうでしょうか。これは問題と考えるよりも、欠落と見るよりも…、多くの場合はそう見られますけれども、自閉症等の診断を受けた場合、ほかの場合でもそうですが。

まず自閉症と診断されると最初に「これからこういう問題も出てくる、ああいう問題も出てくる、大変だ、とても対応できない」ということを言われます。これでうまく仕事も見つからないだろう。どうするんだ。友人もできないだろうと、心配するわけです。

しかし、同じ特徴を考えても、例えばコミュニケーション、これを弱みととらえるのではなくて、このコミュニケーションスタイルというのは、直接的で事実に基づいているので、この特徴を生かすことができる、そして強みにすることができるはずです。DSMIVでいっているところの「限定的な関心」というのがありますがけれども、これを変えましょう。これを情熱、あるいはフォーカスの当てられた関心、あるいはスペシャル・インタレストと言ったらいいと思います。

多くの人々に言わせますと、トーマス・エジソンは、アスペルガーがあったということです。少なくとも、その傾向があったでしょう。彼は、電球を発明するのに50000回試行

したそうです。この情熱があつて、フォーカスができたから、彼は仕事に成功したわけですね。フォーカスを当てる、関心を持つ、強い関心を集中する。自分に対して、ベネフィットがある領域でそれができる。それが最終的には社会に貢献できた。そして彼の場合には、それで非常に有益な電球の発明ができたのです。

トニー・アトウッドさんという人は、アスペルガー症候群について、一番よく知られた専門家です。彼によりますと、特別な関心というのは、卓越した集中力を発揮してしまうがために、日々の機能にも障害をきたすというものだと言っています。

こちらが、私が特に興味関心を持っているものです。時として複数のものに同時に関心を持ってしまう場合もあります。今までに関心を持ったことのあるものがこちらです。最後にクイズをやらせていただきますので、ぜひ覚えておいていただければと思います。

関心に基づいて仕事をするということについて、例を見ていきたいと思います。私ที่บ้านに居るとき、特に得意としているのは、自閉症スペクトラムの子どもに対して、音楽を教えるということです。なぜそれをやるのかといいますと、治療面から、音楽というのは効果があるというだけではなく、対人関係や友人をつくる、バンドに参加するというような、コミュニティとのやり取りを学ぶ場にもなるわけです。

ある子どもは、非常に地下鉄の地図に関心を持っていました。ボストン全体の公共交通機関すべてに関心を持っていましたし、またコンピュータも好きでした。この子どもが仕事のできる年齢になったときに、例えば公共交通機関のウェブページの地図を設計したらどうかと思ったんです。

マサチューセッツ州ボストンの公共交通機関というのは、優れたウェブページがなかった。しかも理解できるものがなかったし、また使いやすいものでもなかったということ、私は知っていましたので、そう思ったわけです。

それからもう一人若い自閉症の女性がいました。言葉で人とやり取りするのが苦手でした。ほかの人と同じぐらい話是可以するんですけども、非常に恥ずかしがり屋でした。ほかの人とのやり取りというのが、非常に苦手だったわけです。テンプル・グランディンやほかの自閉症の人と同じように、この人は動物が大好きでした。ほかの人以上に動物を理解することができたのです。

彼女が特に関心を持っていたのは、馬の医者でした。馬のための獣医ということに関心を持っていました。関心を持っている分野を活用して、仕事を探すということの例だと思います。彼女は、馬を助ける医者以外にはなりたくなかったわけです。そこで私は彼女と

話をしてみました。

最初は、彼女が馬に関心を持っているというところから始めました。医療的な問題を持っている馬を助けたいという話になったわけです。その後、優れた獣医師になるためには、何が必要なのかという話に発展しました。馬のオーナーときちんとコミュニケーションがとれなければならない。例えば馬のどこが悪いのか、どういった治療をするのかというコミュニケーションをとらなければなりません。

それができるようになるためには、コミュニケーションの勉強をしなければならないということが、そこで把握されたわけです。何が必要なのかということが分かった。つまり獣医師として成功するために、何が必要なかが分かると、彼女もほかの人とのコミュニケーションという問題に対処するという努力をしました。その結果、コミュニケーションスキルが向上したという、彼女の例もあります。

私も同じような経験をしています。大学の学部時代に、言葉以外でコミュニケーションをするというの、一つの相互作用の方法だと分かったわけです。コミュニケーションの80%は言葉以外でなされるという調査結果もあります。例えばボディーランゲージで何が伝えられるかということです。もしかすると、言っている言葉とボディーランゲージで伝えられていることが逆のことになる場合もあります。

私にとって、ほかの人との社会的な対人関係を改善するためには、このボディーランゲージは学ばなければならないと、気が付いたわけです。私は何時間も本屋でボディーランゲージに関する本を読みあさりました。その結果、言葉以外でのコミュニケーションに関する辞書のようなものを見つけまして、それも非常に役に立ちました。

もう一つ例があります。非常に嗅覚が優れていた人がいました。自閉症の人の特徴として、感覚の問題を抱えていることは多いです。あまりにも感覚が鋭敏すぎる、過敏である。そうすると、たくさんの情報が入ってきてしまいます。

だからこそ「フラッシュをたかないでください」ということを、今日、冒頭でお願いをしたわけです。視覚的な入力に対して過敏な人もいます。多くの人にとってフラッシュというのは、あまり快適ではありませんけれども、特に自閉症の人にとっては、全くそれによって気が散ってしまうというものです。

その嗅覚過敏だった男性の話に戻りたいと思います。父親が家にいました。父親も自閉症で、エンジニアです。その人が鍋で料理をしています。家の反対側にいた息子が、父親に「なぜスチール製の鍋で調理しているんですか」と聞きました。お父さんはエンジニア

ですけれども、その段階で、こういった種類の金属鍋を使っているのか分かるぐらいに、息子の嗅覚が優れていると気付くわけです。

最終的にはこの息子は、飛行機が格納庫に入ると、イヌのように、近づかなくても周りの空気からエンジンの匂いが分かる。そしてその匂いから、このエンジンはオイル交換が必要だ、あの飛行機は別のものを修理する必要があるということが、分かる状態になったわけです。彼は自閉症的な行動をとっていました。通常の職場では認められないような行動なんですけど、ほかの人ができないことができるということで、職場の人もそれを認容したという例があります。

では、ほかの分野も見てみましょう。人によっては、言葉でのコミュニケーションに問題を来す場合があります。そういった人については、あまり言葉でのやり取りが必要とされない職場が考えられます。一方で、社会的な対人関係が苦手な人もいます。その人たちが得意な分野もあります。

感覚刺激ですが、ある日本人の親御さんがいらっしゃいました。私がワークショップを開いたときに、その親御さんによりますと、13歳の息子さんがいるということでした。この息子は水道の栓の下に手を出して、水を感じる。そしてそれを散らかすという習性を持っていました。5回目にそれで家が水浸しになったときに、母親は「息子は何をすればいいんだろう」と思ったわけです。

かなり重症で、言葉でのコミュニケーションは苦手だ。ではこういった雇用が考えられるだろうか、考えたわけです。蛇口の下に手を伸ばすのはなぜなのか。例えば親指に水圧がかかる、その感覚が好きである。それを使って、高圧で水を出すのが好きなのではないかと考えたわけです。そこで、水を高圧で出すような職業は何だろうかと考えてみました。

すぐに私が思いついたのは、消防士です。非常に強い男性が4、5人かかって、はじめてホースを持てる。そうでないと使えないということです。ただ、消防士の要件は何なのか考えてみました。優れた言葉でのコミュニケーションスキルが必要です。例えば消防団長など、そこで指揮を執っている人の言うことを聞かなければならない。さらに同僚に対して、家が倒壊しそうだといった場合は、指示も出さなければなりません。ということは、消防士は彼にとっては駄目だということになったわけです。

しかしながら、高圧で水を出す職業はほかにもありました。例えば車の洗浄、ビルの洗浄、あるいは高圧を使って舗道を洗浄するということも考えられます。では庭師はどうでしょう。庭師の場合ですと、低圧で植物に水をやるのも好きであれば、問題はないかもし

れません。しかし、高圧でなければならぬということであると、植物が死んでしまいません。

その子の母親は「うちの息子は、スケジュールが好きなんだ」と言ってきました。では、例えば水を配達する車のアシスタントはどうだろうかということになりました。すべてのお客さま、すべての会社のところに、予定通りに水が届けられるようにするというのはどうだろうか。水をスプレーするとき、圧力が親指にかかるのが好きだということであれば、ほかにも可能性があるかもしれません。

自閉症の特徴、この場合には感覚刺激、あるいは刺激を求める行動といった特性を使って、雇用で成功するという一つの例でした。

自閉症を持つ人にとりましては、変化というのが苦手です。なるべく変化の少ない職場、安定した職場環境のところ。場合によっては、家族でやっているような自営業というところがいいかもしれません。もしかすると、組み立てラインというのも考えられるかもしれません。

多くの自閉症の人は、視覚、運動神経が非常に強いということがありますので、小さなものを組み立てる、例えばコンピュータの配線基盤を作るというのはどうでしょうか。あるいは行動面で問題があるといった場合には、その行動が引き起こされないようにする、それができる職場が必要となるかもしれません。

一方で、サヴァンといわれるスキルを持っている人がいます。ある友人が、非常に数学が得意だったんです。「何月何日に生まれたのだ」と言われて「何日」と言うと「じゃあ、それは日曜日だったね。ということは、9億4,700万200秒、生まれてからたっているんですね」とすぐ言ってくれる、そういう人がいました。彼は税理士をやっていて、そういう仕事は非常に合っていたと思います。

またある人は、光るものが好きでした。ものを取り上げて、こんな感じで見えています。自閉症の人に慣れていないと、見慣れない光景かもしれません。この人は55歳で、コインディーラーとして非常に成功しています。古いコインを売って、買って、そして非常に成功している人です。

雇用態勢が柔軟であるということは、自閉症の人にとって重要です。非常に競争力のある、フルタイムの雇用ということだけを考える人が多いわけですが、雇用の形態としては、パートタイムということも考えられます。

テンプル・グランディンさんの場合には、自営でやっていました。つまり食肉加工場の

設計をやっていたわけです。彼女によりますと、自営であることによって、会社に行って仕事をして、オフィスの中での政治的なやり取りや、対人関係で煩わされる前に家に帰れる、それが自営のいいところだと言っていました。これは自閉症でない人にとっても重要かもしれませんが、私どもにとってはより重要です。私自身も、自分は自営だと考えています。

私の使命は、自閉症の人たちが生産的な生活ができるようにする。その支援をするということです。その一部として、世界中いろいろなところに行ってコンサルティングをしたり、あるいは自閉症について話をする、プレゼンテーションをする、本を書いたりする、あるいは自閉症の子どもたちに音楽を教えたりするという活動をしています。

どのように対応したらよいのか。スキルを教えることができるのであれば、どうやって教えたらいいのかということを探すということが必要です。ただ、スキルは教えにくいということがあります。その場合には、それを避ける方法、あるいは適応する方法を考えていきます。

自閉症の人にやってほしい任務があったとしたら、それがうまくできるように教えられないか、そしてさらに適応できないか。そうでなければ、定型発達者あるいは自閉症でない人たちが、それにうまく対処する方法を学ばばいいわけです。自閉症の人たちが必要としているニーズを提供し、そして生産的な生活を支援していくためには、こういった対応が必要です。

財務的な側面から考えてみますと、自閉症の人の雇用を支援しなければ、この人は施設に入所することになるかもしれません。そうすると、ほとんど仕事もせず、何もしないという生活になります。これは実は、非常にコストのかかることです。

しかしながら、自閉症の人が、自分の能力が発揮できる雇用が探せるような支援をしたらどうでしょうか。そうすると、その人は自立的な生活ができる。そして社会貢献ができる。そして幸せな、充実した生活ができます。自分がいい仕事ができるという満足感を得られる。それを支援することによって、それができるということになります。

これで最後になりますけれど、本日皆さんにお会いできて、非常にうれしく思っております。自閉症の人たちが雇用を探すことによって、生産的な、そして充実した生活ができるように支援してくださっている皆さんとお会いできて、非常にうれしく思います。ありがとうございます。

パネルディスカッション

発 表

## 発達障害者支援法について

日誌 正文

厚生労働省精神・障害保健課 発達障害対策専門官

こんにちは。ショアさん、ようこそ日本へ。みなさんもようこそ。ショアさんが時間を守ってくださったので、私も頑張りたいと思います。それでは早速発表に入らせていただきます。

発達障害者支援法についてお話をさせていただきます。発達障害者支援法は、①発達障害を早期に発見し、発達支援を行うことに関する、国及び地方公共団体の責務を明らかにすること、②発達障害者の自立及び社会参加に資するよう、その生活全般にわたる支援を図ることを目的として、これまで制度の谷間に置かれていて、必要な支援が行き届きにくい状態となっていた発達障害を「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能障害であって、その症状が通常低年齢において発現するもの」と定義し、支援の対象として位置付けました。

この自閉症という中には、知的障害がある方も当然含んで、自閉症としての支援の必要性というものについて、考えていくこととなっています。また、その他これに類する脳機能障害の中には、さまざまな障害があります。例えばトゥレット症候群のような障害も入ってきておりますので、皆様、お戻りになって発達障害について説明されるときに、ぜひこの「その他」という部分についても、ご配慮をよろしくお願いします。

厚生労働省の施策は、この支援法の構成に沿って施策を行っています。

一つ目。発達障害者には幅広い領域の支援が必要になっていることを踏まえ、各自治体において、効果的な関係領域のネットワークを形成することを目的として行っている「地域支援体制の確立を行うための事業」、発達障害の本人が困っていることにご家族や周りの方が気付くというのは、先ほどショアさんのお話しにもあったように、スペクトラムといって、かなり広いとらえになりますので、気付く時期というのが早い方もいれば、成人になって初めて分かるという方もいらっしゃいます。

気付かれるタイミングがまちまちとなっていますので、子どものころの担当部署だけが知っていれば済むという話ではない。成人にかかわる部署も含まれてくるということでもありますので、各コミュニティの中で、発達障害について知らないということがないように



していこうというのが、地域支援体制作りの重点となります。

二つ目。発達障害者支援において、標準的な支援方法が十分に確立・普及されていないことを踏まえ、有効と認められる支援方法をモデル事業や研究をとおして把握します。さらに多様な手段をとおして普及を図るとともに、支援の提供を進めることとしています。

標準的な支援方法の確立という部分ですが、現在各地、各機関でさまざまな発達障害の方への支援方法の工夫がされていますが、それを否定するものではないのですけれども、あまりにもバラバラに提供されていることによって、支援を受ける側に混乱が起きている。あるいは標準的なものがないことによって、支援が始められないということも、現実には起きてきておりますので、その部分について、国としてのある程度標準的な支援方法をつくろうということをお考えしております。

また、多様な手段をとおして普及を図るといのは、ウェブサイトで現在いろんな発達障害についての情報は提供されているものがありますけれども、ウェブサイトをご覧になれない、例えばお年寄りの方ですとか、年齢が小さい方、いろんな環境の方がいますので、ウェブサイトだけではなくて、今日のようなシンポジウムやパンフレットなど、いろんなかたちで情報が届くように、工夫をしてみたいと考えています。

三つ目。発達障害者やその保護者に対応できる専門家が十分でないことを踏まえ、地域の核となって支援を進める人材の育成や広く人材を活用するための対策などを課題として取り組みを行ってきております。この人材ということですが、いろいろな意味が含まれていると思います。まず、よい支援とは何かご存じの方で、それが自分でもできる方。それから周りの人にも伝えることができる方。そういう人を人材と、ここでは考えております。さらにプロではなくても、既に上手に発達障害の方を支援されている方というのは、世の中にたくさんいらっしゃると思いますので、その方たちに「この部分は、とてもよい支援です」ということを、意味を付けて励ますことができることも、これからのプロとしての人材には、求められてくるのではないかと。そういう方を増やしていきたいという事業を進めております。

以上です。ありがとうございました。

## 発達障害者への就労支援の取り組み

市川 浩樹

厚生労働省障害者雇用対策課 障害者雇用専門官

職業安定局障害者雇用対策課の市川と申します。よろしくお願いたします。私のほうからは、ハローワークを中心とした、発達障害の方々ができる施策、サービスについてお話ししたいと思います。私たちは職業安定局といいまして、昔は労働行政という言い方をしました、雇用の部分の施策ということになりますので、ハローワークを中心としたということで、お話をさせていただきます。

このスライドにもありますが、実は発達障害者の方への就労支援の施策は、日詰専門官が説明していただきましたが、発達障害者支援法の施行以前から、ハローワークあるいは地域障害者職業センターといったところで、既に就労支援をしていました。

障害者の雇用促進等に関する法律というものが、私どもの根拠法でございます。その法律の中では、職業生活を長期にわたって維持する上で、著しく困難のある人たちということで、サービスの対象を定めておりますので、手帳制度の今、谷間にある状態の方においても、ハローワークの専門援助部門をとおして、サービスが受けられるということになっております。

このスライドの右側に当たります「発達障害者が利用できる支援施策」というのがそういうものです。どういうものがあるかといいますと、1番目はハローワークの専門援助部門です。障害のある方の、窓口での紹介行為、相談を受けられる。それから障害者職業センターで職業評価や職業準備支援、あるいは適応支援。障害特性に応じた、専門的な支援を受けることができる。

それからトライアル雇用という制度も受けられる。3カ月間のお試し雇用ということになっております。下に※で8,000人～9,500人とありますが、20年度の予算で9,500人ということですので。

それからジョブコーチ支援も、当然手帳をお持ちでない発達障害の方も、支援を受けられるということになっております。障害者就業・生活支援センターという、身近な福祉圏域ごとに設置を目指している機関で応援してもらおうということも、当然できるということですので。

この左側の半分が、特に発達障害者支援法の施行を受けてということもございますが、発達障害の方々の障害特性に応じた支援を、しっかりやっていかなければならないということ、作り出してきたものです。

1 番目の「若年コミュニケーション能力要支援者就職プログラム」というものがございます。この支援策がなぜつくられたかといいますと、発達障害の方々は、いろんなレポートがありますけれども、障害者福祉といいますか、障害者枠での施策に、幼児期から乗っていない方が、たくさんいらっしゃるということが分かっております。

例えば学習障害。LD 親の会のアンケート等の報告によりますと、学校で一般校を卒業されている方がほとんどで、特別支援学校を卒業されている方は、せいぜい2割ぐらいなど、一般のサービスを利用していく方が非常に多い。

卒業したら就職という話になるわけです。そのときに、学校にいる間はよかったけれども、就職活動に入って面接がうまくいかない。適応できなくて、転職を繰り返してしまう。そして引きこもったりすることもある。二次障害でうつになったりする人も、中にはいるということです。

労働行政の中では、卒業後なかなか就職できていないという施策の一つで、若者の支援施策もあります。その枠組の中でも、発達障害が要因で就職活動がうまくいっていないという方もいるだろうということで、出されたものです。今年度から始めました。

このポイントは、ハローワークの専門援助部門による支援ではなくて、一般の窓口が発達障害のことに見識を持っているスタッフを配置して、まだ気がない方については、情報提供する中で、ひょっとしたらこういう可能性もある。あるいは、同じような悩みを持っている方が相談している専門支援機関をご紹介します、そこのサービスを受けてはどうかというご案内をする。あるいは、ご本人がやはり障害という枠組みでのサービスを希望されていない方は、そのご本人の特性に合った相談や支援をしていきたいと思います。一般の窓口において、そういうことをやっていくための施策をつくっております。

従来の障害者枠だけの雇用支援施策だけでは納まらない。そこに乗っていない人たちがいる。そのための施策を考えていかなければいけない。そういうことで、ハローワークはこの制度とはまた別に、発達障害にかかわる研修を、ハローワークの職員向けに強化しております。

一般の窓口の普通の担当官の方にも、このような障害をお持ちで、就職活動で苦労されている人たちもいるのだと、ご本人たち個別の特性に応じた支援をすることで、就職につ

ながるのだということを、研修の中で盛り込んできております。

もう一つは、共通基盤の整備ということでございます。まだ就労支援の部分や、青年期における発達障害の方の就労支援の分野については、やっとならうを集め出して、好事例が幾つかそろってきたという段階でございます。

これを広めていきたいと思っております、全国6ブロックという小さな単位ではございますが、発達障害の支援者の方、ハローワークの窓口もそうですが、保健医療関係の方、それから教育関係の方などに「発達障害の方の就労の支援とはどういうことなのか」ということについての研修会をしております。

それから、事業主さん、企業の方に対しても、どういう支え方、あるいは職務の設計の仕方をすれば、ご本人がよい仕事をしていただけるのかということについて、研修・啓発をするということもやっております。

今年度から、ご本人にも参加していただいて、職場での困り感、あるいは就職活動でどんなところで困ったのかということ、ご本人からお話ししていただき、支援者は自らの支援についての修正をしていただく。そういうご本人の発信というものを受けて、自らの取り組みについての修正を図る刺激としていただくということを図っております。

また、発達障害者支援センターに委託をしているわけですが、全国6ブロック、その主催地の労働局が全面的に支援しますので、ハローワークと発達障害者支援センターの関係づくり、事業主さんと発達障害者支援センターの関係づくり、顔の見える応援団をつくるということにおいても、事業を活用して行っているわけです。今は委託施策です。

それから発達障害者の支援技法につきましては、高齢・障害者雇用支援機構というところに開発をお願いしております。特別な特性、ご本人に応じた、本人に伝わるキャリア形成の仕方、そういうものを本人と一緒に作り出す手法というものを、今研究して定着化させ、それから全国に広めていこうとしているところでございます。

簡単ではございますが、ざっと雇用支援施策として、我々が打ち出しているものについて、ご紹介させていただきました。以上でございます。

## 一貫した療育的支援の構築

吉野 邦夫

(福) 西多摩療育支援センター施設長

西多摩療育支援センターの吉野でございます。私が発表したい内容は、レジュメのほうに要旨をまとめてありますので、ご覧いただければと思います。

これを書いた後に加我先生のレジュメを見ましたら、発表したい基本的スタンスがほとんど同じだということがわかりました。難しい医学的な話は、加我先生に全部お任せして私が言いたいのは一点だけです。先ほど雇用のご説明があつたのですが、現場サイドから見ますと、雇用していただきたいと言ひ得る状態の人に育て上げるのが、どれほどしんどい道筋かという点です。

特にカナタイプの方は、おおよそ見当が付いてきていますが、高機能の人たちというのは、就労の年齢になる以前に、もう散々傷ついておりまして、とてもじゃないけど雇用は勧められない、むしろ精神科に入院をいつ勧めようかと、そういう状態のお子さんが決してまれではありません。

そういうことから、雇用を考えている子どもたちに育てていくには、ずっと小さいときから将来を見越した一貫した育て方、あるいは地域の支援、学校とのコネクションというものを考えていかないと、そう簡単にできるものではないということを、私は今日お話ししたいと思います。

先ほど言いましたように、難しいお話は簡単にさせていただいて、この20年ほど付き合ってきた子どもたちのビデオを見ていただくことが、私の一番の願いです。最初にPowerPointで簡単に説明させていただきます。

発見、診断についてで、これも後で加我先生からお話しいただくとおもいます。低機能のASDのお子さんたちというのは、学校に入る前に診断がついているという人がほとんどであります。地域によっては知的障害と言われていて、学校に入ってから改めて自閉症という診断がつくこともあります。典型的な低機能の方たちのほとんどは、学校に入る前にもう診断がついていて、それなりの準備が、親御さんの心の中にもできている人が多いのです。

ところが高機能の場合は、幼児型あるいは小学校低学年あたりの学業不振だとか適応障

害といった段階のお子さんから、4年生あたりの不登校を中心とする、さらには思春期の精神科の問題を抱えてくるような方、さらには成人になってから診断する方、と本当にいろんな年齢で発見されます。

ある意味では、どこから問題が顕在化してくるかというのは、本当に分からない人が多いのです。もう少し高機能自閉症の人たちの特徴ということが分かってくると、発見が早くなっていくのではないかなということを期待しております。

こういう人たちに対して、どういう療育を考えていくか。これは私も、ずっとこの仕事をやりながら悩んできたことです。時代、時代で考え方が変わったりします。今考えて一番妥当なものは、イギリスの自閉症協会が提唱しております S.P.E.L.L (スペル) という五つのポイントを、高機能であろうが低機能であろうが、原則的にこれを踏まえていこうということであります。

低機能の場合は、最初の入門的な家族ガイダンスと書いたのですが、実はこれは私の一つの夢であります。各地域で、乳幼児健診で発見していくシステムができておりますが、単に病院に送るとか、センターに送るだけで、お母さんたちがガイダンスをどこで受けるかというのは、全くバラバラです。むしろよく分からないのに、先に訓練に入ってしまうということが、日本の場合は非常に多いように思います。

特に東京都の場合は、親御さんたちが「自閉症スペクトラムというのはどういうことか」ということを十分理解しないうちに「訓練しないといけないんじゃないか」と、何か掻き立てられたようになってしまいます。

あるいはネットで情報を得ようとする、とどんどん不安が高まってきて、むしろ親御さんのほうが精神的にまいってしまうことも、しばしばあります。そういうことで、市町村が責任を持って家族にガイダンスをしていくというのは、これから厚生労働省の一つの仕事ではないかと、私は思っております。

療育的なモデル。これはいろんなモデルがあります。先ほどの S.P.E.L.L を踏まえて、能力をどうつくっていくか、あるいは能力をどう組織化していくか。organize という言葉を、イギリスやアメリカでは使うようです。能力を organize していく。それで一定のまとまった自立的な活動ができるようになる。さらには対人協調的な能力をつくっていくということと、発達をずっとモニターしていく。このモニターということが、非常に重要ではないかと考えます。さらには、家族に対するさまざまな支援があると思います。

高機能の方も原則的には同じですが、特に認知、学習というところの応援をきちんとす

る。さらには対人関係スキルをきちんと応援してあげないと、彼らのプライドが育ってきません。先ほども言いましたが、非常に低学年で傷ついているお子さんが多いというのは少し日本の特徴ではないかと思っております。

一昨年、デラウェアにおじゃまして、PECSを開発したアンディ・ボンディとお話ししたことがあります。デラウェアでは小学校・中学校の不登校というのはまず問題にならない。そういうケースはほとんどない。これが日本ですと、思春期の10人に1人は不登校と言われる現状で、あまりの違いに驚いた次第です。

いずれにしても、こういう支援のモデルを見ていただいて、なるべくいい発達をしていただくこと。特にそのお子さんがルールを順守するタイプ、あるいは論理性を非常に順守するタイプなのか、あるいは感情で支配されるタイプなのか。こういう人格的な発達をきちんとモニターしていくようなことも重要だと思います。

さらには家族のメンタルヘルスというのが非常に重要だということが、現場ではよく分かっております。家族の人の精神的な健康をどうつくっていくかというのも、ASDの人の支援の大きな要点になろうかと思えます。

ここで、私と出会った子どもたちの姿を、ちょっと見ていただこうと思います。

これは最初に、スケジュール化だとか構造化といったことです。IQが50前後のお子さんで、この当時は低機能です。構造化といっても、非常にたくさんの種類がありますから、みんながこうしなければいけないわけではありません。4、5歳の子どもにはこういう方法で教えていくのもいいかと思えます。こんなふうに取り組んでいます。

次は、そういう構造化の指導を、今度はホームワークとして、家庭にそれを持って帰って活用するというやり方です。このお子さんは、朝の食卓の準備をお手伝いするというのが、彼の一つの仕事です。毎朝、彼はこれをやって、ちょうど今、高校3年生まで大きくなっていますが、随分幼いころの姿です。

これはホリデーマイスター、日曜日のマイスターで、家族で工作をしようという集いです。本箱を作ったり、工作スキル。こういう活動を通じて、親御さんが子どもの特徴を見つかけたり、楽しむということが狙いです。このノコギリを持っているお子さんは、非常に重度のお子さんですが、お父さんと一緒に活動をしています。

次がスモールグループでの遊びです。

これは家庭での様子です。今、高等部の生徒さんですが、全く言語のない重度のお子さんです。しかし、洗濯とかいろんな身づくろいを全部自分でできるようになっています。

言葉がありませんので、中学生から PECS 法をマスターして、そういうコミュニケーションをとっております。

これは彼が家庭菜園を一緒に作っているところです。こういうふうに関心することが大好きな、カナリータイプのお子さんです。

この方はもう一般就労なされた。この方も IQ は 50 まで届きませんが、中華レストランで就労なされた方です。

これは最近。私たちが混じっています、高機能のアスペルガーの小学生たちの、スモールグループの活動です。当然アスペルガーの人たちにも、こうして構造化を入れてあげないと、普通の環境だけでは混乱することがよくありますので、そういう隠れた設定を持ちながら、応援しているところです。

次は PC 学習の様子で、こういう機械操作は大変得意ですから、どんどんできるレベルを上げて、その人たちの能力でできることは、できるだけたくさんやっていただこうと支援しています。

最後です。これは最初に出てきたお子さんが、今ここまで大きくなりました。ホームコンサートを開いているところです。

ありがとうございました。あとは Power Point を見ていただきます。

今の高機能の人たちは、幼児期からこういう「ソーシャルストーリー絵本」というのをお母さんや幼稚園の先生に作っていただいて、絵本のかたちで環境を理解したり、ルールを理解するというをやっています。これは保育園の園長先生がお書きになった、ソーシャルストーリーの絵本です。これはお母さんが書かれた「5 ステップ法」という、風邪をひいたらすぐ学校を休もうとするお子さんに、風邪にも五つの段階がありますということから、自分の状態を判断していく、状況を理解、判断していくということを教えているやり方です。

問題点はレジュメのほうに書きました。いずれにしても、一貫性をどうやってつくっていくのか。個別教育計画というものをどうつくっていくかというような、たくさんの宿題を持っております。

こういうことを地域で、いいネットワークをつくりながら、就労支援ができる、あるいは就労支援を求めるお子さんにまで、うまく育てていってあげたいというのが、私の夢であります。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。



## アスペルガー、高機能自閉症者の就労について

須田 初枝

日本自閉症協会副会長、(福)けやきの郷理事長

皆さんこんにちは。今まで専門家の先生、吉野先生は特に専門家の先生で、理論的なことをまとめられていました。私はたった一人、親として、就労について子どもをどうやって育てたらいいかということを中心にして、お話ししたいと思います。

実は4年ぐらい前に、私は3年間にわたって高機能とアスペルガー症候群の人たちの実態調査を行いました。そのときの就労の実態は、20歳以上の方40名が、そのアンケートの中にありまして、その中の33名に回答をいただきました。しかし就労については、大変難しい問題がたくさん出ておりました。

そこから私が考えましたことは、現状及び幼児期からの、どのような療育や教育、およびどのような環境の中で心を育て、社会の中で生活できるかを目標にして、人間らしく人生を送ることが、どうしたらできるかということ、幼児期から一貫してやっていくことが、すごく大事なことだと私は考えました。

そして就労について、生活していくためには、自閉症の抱える社会性、コミュニケーションの問題、異常行動、これなどに対する改善が非常に重要です。多様な環境の中で、本人が心の中に感じられるような会話や行動、言葉のない子には一緒になって共有して遊ぶなど、いろいろなことをして、心の中に感じさせていかなければならないということ、考えております。

子どもとのかかわりの基本は、親との信頼関係が樹立しなければ、自閉症の子どもたちは絶対に付いてまいりません。その信頼関係をどうつくるか。これから『かがやき』という本が、自閉症協会から出るのですが、その中の、割合に子どもをよく育てた15歳から43歳までの親御さんたちのアンケート調査の中で、幼児期にはやはり子どもと一緒にしてお皿洗いをするとか、お掃除の手伝いをするとか、家庭の中でお互いに共有して生活することによって、非常に子どもと信頼関係ができています。

私などは、実は多動で大変な息子でしたから、外に飛び出して社会の中で、電車が好きなので、電車の中で乗客の眼鏡を取りはずしたり、いろんなことをされましたけれど。やはりそういう中で、社会ではこういうことは許す、こういうことは駄目だということを教

え込んでいったことが非常によかったと、私などは思っております。

そういうかたちで、親と子どもとの信頼関係がまずできることによって、いろんなことを教えることが、徐々にできてきます。母親なり父親なりを絶対に信用しなければ、自閉症の人たちは、なかなか自分の心を開いて付いていくことができないということを感じております。

もう一つ、健常児との発達の差異を見極めることです。やはり重いお子さんほど、なかなか心の中が分かりませんが、一緒に共有することによって、わが子が何を考えてこういう行動異常をするのか、何を求めているのかということが、非常に分かるようになります。そうなってくると、子どもが親に付いていくこともできますし、自分の心の中で「このことは駄目なんだ」ということを、耐えていくこともできるようになってまいります。

それから関係者一同が個々に合わせて、喜怒哀楽の心の揺さぶり、と私はよく申しますが。自閉症の人たちは心の中に喜怒哀楽を持っていながらも、喜びや楽しみは感じるほうですが、苦しみや悲しみというのは、非常に持っていながらそれを表現することができない。やはり社会に出ると、悲しみと苦しみはたくさんあるはずで。そういう意味におきまして、悲しいこと、苦しいことを少しずつ教え込んでいく。

環境をつくって、その中で分からせていくということが、非常に社会の中に出て、いろんな人と付き合いの中で、相手の気持ちが分かるようになってくる。そういうことがなければ、社会の中に出て、やはりいろんな問題を引き起こして、駄目になっていくということを、このアンケートの中では、非常に感じております。

33名のうち、ほとんどの方が一度就労したけれども、やはり駄目だったという理由は、対人関係の問題。仕事はできるんだけど、なかなか友達同士がうまくいかない。それから上司とうまくいかない。特に高機能の人は、へ理屈を言って逃げてしまう。そういうことで会社をクビになる方が多いので、先ほどから申し上げましたように、個々の精神的に耐える力、相手の気持ちを分かる力を、小さいときから徐々に、その子に合わせてやっていくことが、とても重要なものだと思います。

アンケート調査の中で、特に高機能の方ですが、行動異常や言葉の異常。言葉はあるんですが、自分勝手な言葉だけしか使わないで、相手の言葉を聞こうとしない等が高機能の人に多数見受けられました。これも上手な会話の対応をしてあげることによって、受け答えがスムーズにできるようになります。

それには先ほども話しましたように、幼児期から相手の気持ち、目を見て「この人は何

を感じて、こういうことを言ってくれるのか」ということを分かるということによって、自分の言いたいことも言って、相手に分かってもらう。分かってもらえないときは、自分が引くというような、そういう気持ちが出てくるようです。

スティーブン・ショアさんも吉野先生もおっしゃっていましたように、特異な能力を十分に持っている。相当重いお子さんでも、手先のすごく器用な人たちがおります。それは私のけやきの郷という施設の中で「この子がこんなことができるのか」というようなことがあります。長いスパンでその子たちに適当な仕事をさせておくと、非常に手の器用な子どもたちがおります。

ですから、そういうものを引き出して、それを就労のほうにつなげていかなければいけません。それには、先ほども話しましたように、自分だけで楽しむのではなく、相手に喜んでもらうようなコミュニケーションの対話ができなければ、就労は長く続かないと私は考えております。

これまで述べた中でも、けやきの郷の話をちょっとさせていただきました。レジュメには書いてございませんが、うちでは福祉工場というものを一般企業と同じように、補助金をもらいながらもやっております。それは集団自立といいまして、IQも測れないようなすごい重度の子どもと、軽度が二人で、あと重度ですごく重いお子さんが二人ぐらいおります。

その子たちが集団で一緒になって、力を合わせて一つのパレットという、フォークリフトの下に敷くすのこを作っております。生活と働くことによって、先ほどショアさんが話したように、言葉ではコミュニケーションを持たないけれど、目と目、それから行動で非常に助け合って生きていくこと。これは私も、自閉症がよもやここまで育つとは思いませんでした。

指導員が、一つの働くという仕事の中で、一緒に生活するという中で、お互いにコミュニケーションを持ちながら、一つのパレットを作ったり、共に生活して助け合っているということは、やはり自閉症の人たちは決してあきらめてはいけません。どんな重い子ども、どんな軽い人たちでも、それぞれ自閉症の行動特徴を持っておりますけど、その行動異常が自然と、働くことによって改善されてくる。改善されてくることによって、地域の中に出して行って、就労するときに、発達障害者支援センターのようなものが援助しながら、ジョブコーチも入れながらやっていくということが、何よりもこの自閉症の人たちが安定して就労していく基本であると、私は思います。

繰り返して申しますけど、それには社会生活に必要なスキルを獲得する、経済活動に不可欠な精神的な耐性、心の中で耐えるという力も、やはり培っていかねば、就労というものは、特に日本では。国民性と申しますか、私たちが施設をつくる時に大反対運動がありまして、7年間かかった。そういう社会の中で、この人たちを正しく人間として理解して、働かせてもらうことは、非常に難しいと思います。

社会を変えると同時に、自閉症の人たちの心のあり方も発達させて、耐えることも、喜ぶことも、プライドを持つことも、働くことによってできてくるのではないかと、私は思っております。

話せば長いことなんですが、レジュメの中に、私の調査したアンケートの就労のところだけございますので、これを後でお読みになってくださると、高機能の人はやはり、なかなか就労するのは難しいということが分かってくださると思います。

最後に、皆さんにぜひレジュメを読んでいただきながら、高機能の人たちをどうやって就労させるかということ、考えていただけたらありがたいと思います。以上です。

## 自助グループ

民田 森夫

精神保健福祉士、発達障害当事者

初めまして。アスペルガー当事者の民田と申します。

発達障害のある人に向いている職業は何かと尋ねる当事者や、保護者からの書き込みをネット上でたまに見掛けることがあるのですが、私は存在しないと思っています。この質問は、定型発達者に向けた職業は何かと質問することと同じではないでしょうか。発達障害者という呼び方は、それくらいバラエティーに富んだ人たちの総称です。

コミュニケーション障害のある人も、ない人もいます。実行機能に障害のある人も、ない人もいます。感覚過敏のある人も、ない人もいます。生活していく中で不便なことが存在する、これが唯一の共通点ではないでしょうか。

本日私は、アスペルガー障害の当事者としてこちらへ参加させていただいておりますが、同じアスペルガー障害と診断された人であっても、私と全く異なるタイプの方々のほうが圧倒的に多いですので、今日の話は、一当事者の経験談として聞いていただければと思います。

前置きが長くなりましたが、今回の資料に書いてありますように、私は現在九州のほうで発達障害成人当事者の自助グループ「きなっせ！九州」の代表を務めさせていただいております。私たちのグループは、ちょうど今日で、ミーティングを開始して丸4年になるのですが、代表は毎年代えておりますので、私は4代目ということになります。

代表の主な仕事は、内部の取りまとめと、会場に資料を持っていくこと。ミーティングリストの参加者の管理です。他の役職としては、発足以来ずっと私が担当しております渉外、ウェブサイト管理の広報、会計、会場や私書箱を確保する事務というのがあり、現在は4人態勢でやっています。

福岡市内での月1回のミーティングが主な活動になりますが、平成20年度から、熊本支部でも会場を確保して、ミーティングを行うことに決まりました。ミーティング以外でも食事会や飲み会を行ったりしていますが、参加者全員がボランティアですので、セミナーを開いたり、会報を作ったりするような負担を強いる作業は行っていません。

会の規約も発足前から準備していて、ミーティングでの約束事や進め方を記載したミー

ティングハンドブックの中に明記しています。会場決めやウェブサイトの構築等、他の自助グループ経験者を中心として、入念な準備の元に始めたことが、中心人物が代わっても存続している理由だと思っています。

私たちのグループの存在目的の中で最も重視しているのは、居場所の提供と知恵の分かち合いです。他の自助グループに多く見られる「回復」という視点はあまり重要視していません。

一人ではないという安心感。愚痴を共感しながら静かに聞いてもらえることによる癒し効果。どうすればうまくいくようになるかという知恵を共有して、生きづらさを少しでも解消する効果。そして、あるがままの自分を受け入れられるようになる、セルフエスティームの向上効果があり、会に参加する度に、だんだん前向きになっていく参加者の変化を見ることができ、会を立ち上げてよかったと、心から感じています。

私たちのグループは、発達障害全般を対象としています。最近の傾向として、ミーティング参加者に、アスペルガー障害と診断された当事者の割合が非常に高くなっています。これはコミュニケーション障害や、実行機能障害によって、職務の遂行や職場での人間関係で困難を抱え、うつなどの二次障害を治療する中で、アスペルガーと診断された方が増えているからだと思います。

対照的に、ADHD だけという方はほとんど見掛けません。仕事でミスは多くても、自分なりの工夫と、あとは口八丁手八丁で仕事や人間関係をこなし、ストレスはたくさんの友人たちと遊んで発散している方が多いからでしょう。学習障害を抱えてみえられる方もいらっしゃるいますが、合わない職場で苦勞している方や、仕事をされていらっしやらない場合が多いです。

また、アスペルガー障害の方については、私を含めて、障害者手帳を所持されている方が何人かいらっしゃいます。こういう傾向から、学習障害や自閉症スペクトラムについては、何らかの公的支援を必要とする方が多いのではないかというのが、自助グループをやっている私の結論です。

アスペルガー障害を抱えている人は、就労している場合でも、さまざまな悩みを抱えている方が多く、いわゆる窓際的立場で、何とかしがみついているというケースもあります。私自身、全体を見渡して、状況を瞬時に察知したり、人の顔色をうかがったりするのはとても困難です。不用意なことを平気で言ったりして、後悔することも多々あります。仕事の進め方も最悪でしたので、仕事ができなさすぎるからと、解雇されたことさえあります。

私が仕事ができなかった最大の原因は、仕事をして報酬を得る仕組みを十分理解していなかったことにあります。具体的には、企業は営利を追求するために設立されたものであり、その目的の効率的な達成のため、幾つかのセクションをつくり、おのおのに必要な人材を配置して職務と権限を与え、就業させている。賃金とは、被用者に割り当てられている職務を、被用者がこなすことに対する対価として支払われる。仕事は、クライアントから企業に対して発注されたものであり、担当者個人ではなく、受注した企業に職務遂行という契約上の責任がある。

普段から自分のできる仕事の量を管理し、仕事がオーバーフローしそうな場合は、上司に前もって相談する。企業は契約を履行するために必要な措置を執る。不確実な仕事はクライアントに迷惑をかけるので、職務で不明な点や不慣れな点があれば、知っていそうな人に尋ねる。職場の決まり事や手順の成立には、それぞれ理由があるので、勝手なことはしない。などといった、ごく当たり前のことです。ほかの人の言葉を借りると、お金の流れと言い換えることができるでしょう。

ところが私は、それすら理解しないまま、仕事に行けば給料がもらえるという意識しかなかったのです。以上のことを十分理解した上で、社会の原則に従って、主体的に生きることを心掛ける、感謝の言葉や謝意を十分伝えるようにしたら、仕事がこなせるようになりました。でも、これはあくまでも私の経験であり、ほかの人に当てはまるかどうか分かりません。

私が最初に就職した19年前と比べ、バブル崩壊以降は、年々仕事の効率化が進んで、一人当たり求められる負担が増え、仕事のストレスは一般の方でも増大しているように感じます。昔は仕事での私語によるばか笑いというの、たまに聞こえてきたのですが、今は職場で私語をしている人を、ほとんど見掛けなくなりました。定型発達者でも仕事をこなすのに苦労しているような状況では、発達障害に起因する何らかの困難を抱えた人が、就労を継続するのは非常に厳しいです。

近年、ジョブコーチなどの間接支援、障害者手帳を利用した当事者や事業主への支援等、さまざまな施策が打ち出されてきています。この結果、都市部では大企業が障害者を奪い合うようなことも起こっています。

しかし地方には中小企業のほうが多く、障害者雇用納付金制度の恩恵が受けられない人のほうが圧倒的に多いです。障害者雇用納付金制度の適用範囲拡大が、今通常国会中に採決されると思いますので、少しずつ状況はよくなっていくのではと期待しています。

私たち当事者も、自力でできることは、自分でやるように心掛けなければなりません。しかし、自分の力だけでは困難なこともたくさんあります。その部分について、社会的な支援が、いつでも・どこでも・誰にでも受けられるような社会であってほしいと思います。

最後になりますが、私の夢は「年収 500 万円以上の障害者枠での就労支援の確立」です。一人一人の能力を生かすことができれば、そんなに難しいことではないと理解しています。すみません、原稿を読まないで忘れてしまうので、全部棒読みさせていただきました。



## 自閉症スペクトラム障害の医学的診断治療と支援

加我 牧子

国立精神・神経センター精神保健研究所所長

よろしく願いいたします。私は小児科医として、自閉症その他の発達障害の方々と接してまいりました。最初にお会いした患者さんは、既に30歳を超えているということになりますので、小児科医といいながら、随分大きな方たちともお付き合いをするようになりました。

タイトルが「医学的診断治療と支援」ということでございます。最近では自閉症スペクトラムに関しまして、医学的な診断をする場合には、大部分がアメリカの精神医学会によりますDSMIVの診断基準、あるいは世界保健機関によります国際疾病分類10(ICD10)の中に記載された基準に基づいて、どのような項目がどのぐらいあるかということに基づいて、診断される機会が多くなっていると思います。

自閉症スペクトラムという概念は、自閉症にかかわる症状やその程度の幅が非常に広いので、連続したものとして考えたほうがより良い対応できるということで、できてきた概念だと考えております。いろいろな考えはございますが、現実的にはICD10で言っている広汎性発達障害と、ほとんど同じ意味で使われる機会が多いと思います。

この中で特に、アメリカの精神医学会によるDSMIVという基準では、基本的に社会的な相互関係の障害、コミュニケーションの障害、行動や興味の狭さ、活動のパターンに何らかの異常が、3歳以前に見られているということ。そして、自閉症以外の病気では説明できないということで、診断がされることになっています。

しかしながら、こういった項目は、あくまでも定性的なもので、これがあつたら必ずこういう病気だということには、不足であるということもありますし、判断をする人、診断をする人の経験や力量、あるいは当事者の方の環境条件その他によって、症状や困難度は微妙に、またかなり違ってくると考えています。

私どものところにいらっしゃる方は、あくまで病院を受診される方でございますので、患者さんと申し上げますが、「患者さん」かどうかは、お立場によっていろいろな考え方のあるところだと思います。こういう診断基準を前提とした上で、外来でお会いしたときのご様子、あるいはこれまでの発達のご様子、ご家族のご様子、学校のご様子、あるいは社会でのご

様子など伺いながら診断するということになります。

対人関係といいますと、お母様あるいはご家族との関係、視線の合い方、表情。そして、同じものを共通して見る気があるか。共同注意と申しますが、そういうことがあるかどうか。あるいは外来でちょっと質問をさせて頂いたときに、予定外の応答がないかどうかといったようなことも、診断の参考にしています。

私たちの外来は、じゅうたん敷きの10畳ぐらいのところで、お子さんに自由に遊んでいただいています。おもちゃを置いてありますので、お子さんたちは、いろんなものを広げて遊びます。自閉症のお子さんの中には、積木を延々と2メートル、3メートルつないでいて、並べることを楽しんでいらしたりします。これは3歳のお子さんで、積木の向きもすべて合っております。

それから、大抵のお子さんにはお絵描きをしていただきます。とても上手なんですけど、目のない人の絵など、とても不思議な絵を描いてくださったりしたお子さんもありました。12歳の男のお子さんでは、IQ130に近い方でしたけれども、のっぺらぼうの不思議な人の絵をお描きになりました。どうも体の感覚や、人の感じ取り方や、認知の仕方が違うのではないかと思わせるような絵を描いてくださる方も、結構いらっしゃいます。

ただ、こういう絵を皆さんが必ずお描きになるわけではありませんので、もちろん絵だけで診断しているわけではなく、診断基準、外来でのご様子、そして、日ごろのご様子などを伺いながら、診断するということになります。

実際に自閉症を病気として考えるか、病気ではないとするか、いろいろな考え方がございます。病気とともに自閉症の症状が出現している、あるいは自閉症と似た状態が出現するという病気が、非常にたくさんございますので、ここにお示したような病気がないかどうかということも、診断の際のポイントになります。

結節性硬化症、脆弱性X染色体症候群、先天風疹症候群、點頭てんかんの経歴がないかどうかといったようなことも伺います。これだけで自閉症かどうかわかるというわけではないのですが、脳や脳症の後遺症として、自閉症にそっくりな症状を示す方もいらっしゃいます。

多くの自閉症というのは「一目見れば、あるいは話を聞けば診断できるよ」とおっしゃる先生方も多いんですけども、このお子さんあるいはこの方に対して、診断をただけではあまり役に立たないと私たちは思っていますので、評価のために、それなりに検査をさせて頂く機会が多いです。

基本的には、知能テストを行い、認知の偏りがないかどうかを調べます。物事や人と人の関係のとらえ方がうまくいかないために、暮らしにくさ、過ごしにくさがおありの方が多いので、認知機能の特徴を調べるために、いろいろな神経心理学的なテストを行います。

それから、自閉症らしさを調べるためのいろいろな検査、あるいはチェックリストなどを使って調べさせて頂くことも多いと思います。当然、全部の方に全部の検査を行うわけではありません。ご本人やご家族のご希望をうかがって、周囲の方々や私たちにどういう援助ができるかということを考えながら、検査を選択することになります。

自閉症の方は、半数近くに、何らかの脳波の異常がありますし、実際にてんかん発作をお持ちになる方も1割、2割いらっしゃいますので、脳波など、神経生理学的な検査を行う機会も多くあります。患者さんによっては、脳の形を調べる画像検査ですとか、脳の機能を見るための、脳機能画像検査などをさせて頂くこともあります。

こういった検査を行うのは、その後どのような対応をしていったらいいかを考えるヒントを、一つでも二つでも増やしたいという思いからでございます。先ほど社会常識テストについて触れました。ソーシャルストーリーといいますか、例えば一定の文章を読んでいただいて、こういったようなことはおかしなことか、全く普通のことかといったことを考えていただきます。

例えば「19歳のマキコさんが、飛行機に乗り遅れそうになったので、慌ててご飯を食べないで出かけてしまいました。これは変ですか、変じゃないですか」ということを伺います。これはそんなに変じゃないと思うんですが。

朝ご飯を食べないで飛行機に乗ってしまったので、ものすごくおなかがすいていた。それで自分のぶんはペロッと食べて、その後近くを見たら、小さな女の子が「もうおなかいっぱい。いらない」とか言って、ぐずっていたので、通路に身を乗り出して「お子さん、ご飯いらないんだったら、私にいただけませんか」と尋ねましたと。

これが19歳のお嬢さんだと、やっぱりちょっと変かなと思ったりするわけです。7歳だったら大丈夫かなとか、男の人だったらいいかな、というようなこともあるわけです。この辺は差別にならないように考えていかないといけないんですが、状況によって答が変わることがあることを理解して頂く材料にもしたいわけです。

こういった検査は、また練習をして頂くための題材にもできるということで、いろいろな評価を使って、援助を考えていくということが、大事なことではないかと思っています。そしてまた、こういった課題設定をお母様方につくって頂く、あるいは周りの方につくっ

て頂いて、回答をどうしたらよいかを練習して頂くというのは、とても大事なことではないかと思っています。

脳波の検査の中で、普通のとんかんやけいれん発作を見るだけではなくて、私たちが外来で実施している検査を、一つだけ紹介させていただきます。

自閉症の方々が相手との対人関係を取るのが苦手という背景に、親しい人や、あまり知らない人の顔の区別がうまくできていないのではないかとと思われる方が多いのではないかと考えられます。そこで、自分の顔やお母様の顔、知らない女の人の顔などを見ていただいて、脳波検査を行っています。

そうしますと、定型発達の方の方ですと、自分の顔への反応が一番大きいわけです。お子さんですと、自分の顔への反応も大きいのですが、お母様の顔への反応が非常に大きくなっています。ところが、自閉症の方ですと、顔の区別自体はちゃんとしていて、知的に非常にいい方でも、脳波の反応としては知らない人の顔も知っている人の顔も、自分もほとんど変わらないという結果が得られたりしております。

つまり、親しさの程度や自己と他人の区別に関わる脳領域があまりうまく働いていない可能性があります。つまり一見、障害がなさそうに見え、なかなかケアをしていただけない、配慮をしていただけない自閉症の方が多いのですが、こういうところに困難があるので、ちょっと手助けが必要な方なのだということを、まわりの方に分かっていただくことが大事ではないかと思っています。

自閉症の医学的治療と支援ということでお話させて頂いていますが、今のところ自閉症そのものを医学で治すという方法はございません。それでも、できるだけいい状態で暮らしていただくためには、いろいろな治療法があり、それを上手に使っていくことは、とても大事なことだと思います。

その前提としまして、どんな病気でも早く診断して早く治療するのがいいんだということが、取りあえずは原則でございますけれども、自閉症などの多くの発達障害の場合は、診断が早ければ早いほどいいかという、いつでもそうだというわけではないと私は思います。

私は、適時診断とよく申し上げるんですけれども、自閉症という診断をするということ自体よりは、その方がどういう特徴を持っているので、どういにかかわり方をしたらいいかという、ヒントを差し上げて毎日実践してあげられるようにすることが大切であって、この点は早ければ早いほど良いと思います。

自閉症と言ってあげることだけが、いいわけではないと思っています。それぞれの症状やご家庭の状況、学校の状況によって違うと思いますが、適切な時期に、つまり、その方への支援ないし治療の開始が遅れないで済むような時期に診断をする、あるいは診断をお伝えするというのが大事だと思います。

自閉症のほかに病気がないかどうか、あるいは自閉症の基礎に病気はないかの診断はとても大切です。特に自閉症の合併症であるてんかんに対しては、薬が比較的によく効く方が多いです。行動異常に対しても、さまざまな薬が使われます。これは副作用に注意しながら、適当なものを適当な時期に使って差し上げると、非常に暮らしやすくなるということもございます。

テンプル・グランディンさんも、確かアナフラニールを50ミリグラム1日飲むと、大変暮らしやすくなるということを、本に書いておられたと思います。抗精神病薬や、抗うつ剤の一種を使うこともあります。睡眠障害が非常に強い方が多いのですが、普通の睡眠薬はあまりよく効かない場合があります。その時にはメラトニンがとてもよく効いたりいたします。このメラトニンという薬は、アメリカではスーパーでも売っているような安い薬ですが、日本では医薬品として認められておらず保険も使えません。

それから医学的な治療と同時に、療育的な考え方で治療は、当然大事です。これはほかのゲストの方々がお話しくださいましたので、多くは申しません。行動に働きかける、あるいは自閉症の特徴を応用して、暮らしやすくしていく。あるいは自閉症と一緒に生きていくために、よい方法を考えるといったようなことも、とても大事です。

自閉症の方たちとお付き合いをしていますと、病気としての自閉症だけでは、とても対応しきれないことがあります。自閉症の方の生活を考えながら診療することが、常に私たちに求められていることだと思っています。自閉症の方は視覚的な理解力が強い方が多いということで、これを用いた方法も、暮らしやすくするための一助になっていると思います。

現在まで、さまざまな治療の試みが行われてきております。これは旭中央病院の大屋先生から教えていただいた資料を改変したものです。この中には正しい治療方針もありますが、全く正しくない治療方針もいっぱい入っております。化学物質や、食事とかビタミンに関して、これが原因というのは、証明されているものは残念ながらありません。

こんなにたくさんあるということは、どれがいいか、まだ分かっていないということの証しのようなものです。これをあまり詳しく読んでいただきますと、間違った情報も多い

ので止めます。相当怪しいのも入っているということです。

自閉症を持っていらっしゃる方のご家族、あるいはご本人は、とてもつらい思いをしていらっしゃることが多いので、これが悪いんですとか、これが効きますというマスコミのセンセーショナルな報道によって、さらにまた、わらをもつかむ思いでいらっしゃる方たちを惑わすようなことをしないでほしいというのが、私の願いでございます。そして本当に自閉症の方たちの役に立つような根本的な治療法、あるいは対応法を何とか見つけていきたいものだと考えております。

支援に関しましては、「構造化」が、十分役立つということはすでに分かっておりますけれども、知的なレベルの高い方に関して、それだけで十分ではないこともたくさんあります。ソーシャルストーリーの練習、ソーシャルスキルトレーニングなどを通じて、このような場面ではどう対応していったらいいかを練習していただくのも、とても大事なことだと思います。

医学の立場でのサポートは、先ほど申し上げたとおりで、ちゃんとした診断をして差し上げるということ、適時に診断すること。治療や支援の方法を同時に伝えること、それから治療を行うときに、本当にこれでいいのかということ、常に考えながら行うことだと考えます。

健康管理は、医者だけの問題ではないのですが、とても大事なことだと思います。暮らしていく上では、健康に学習ができる、あるいは仕事ができるというのは、とても大事なことからです。

自閉症の方たちは、どうしても特に学校を卒業したあたりで、大変体重が増えてしまう方が多くて、これを何とかしたいということもございます。全般的な健康管理と、いろいろなケアを通じて、生活あるいは就業につながるような、よい方法、よい手助けの方法について、ご本人だけでなく、周りの方たちの中に知っている人が増えていくということが、とても大事なことではないかと思っています。

ということで、本日の私の話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

ディスカッション

●深津：ここからは、ドクター・ショアを加えた7名のパネリストと、就労支援について最初にお話し合いをして、その後フロアの方からご質問、ご意見をいただきたいと思えます。

今日は発達障害者の教育と就労支援ということで、いろいろなライフスパンの中で、吉野先生のお話にもありましたけれども、検診、早期療育、それから教育に入られて、その後就労という形になるわけで、いろいろなイベントが円滑にバトンタッチされていけば、最もいいわけですが、なかなかそうはまいません。特に高等教育を卒業されて就労にというところは、いわゆるニューロティピカル、定型発達者の中でも、人生で最大で、恐らく最も難しい転機かと思えます。そここのところのバトンタッチを、どのように支援したらいいかというのが、今回のテーマかなと理解しております。

今回は行政の立場から、福祉の支援と雇用の支援ということで、最初に専門家のお二方にお話をいただきました。医師としての立場から、療育のお話と診断治療についてのお話がありました。当事者と当事者のご家族という立場から、経験に基づいてのお話がありました。

それから最初のドクター・ショアのお話は、ご本人が当事者でいらっしゃると同時に、そこにスペシャル・インタレストを自閉症にお持ちになって、それを研究されて、学問とされているというお立場からお話がありました。非常にいろいろなお立場からご発言いただきまして、ここに登っていただきましたので、いろいろなお話ができるかと思えます。

ディスカッションを始めます前に、このセミナーの企画の段階から携わっていただきました、秩父学園の高木園長先生がご出席になっておられます。高木先生は秩父学園、所沢にありますけれども、今日はその発達診療所の医師として、この地域の発達障害者の診断、治療に当たっておられる立場から、最初にコメントをいただきたいと思えます。

高木先生、よろしいですか。今日のご感想でも、何か質問でも結構です。いただけましたら幸いです。

●高木：国立秩父学園長の高木でございます。先ほどご紹介いただきましたように、秩父学園には発達障害専門外来がございます。これは平成12年、前園長でいらっしゃいます吉野邦夫先生が設立された診療所でございます。秩父学園は知的障害の方の入所施設でございますが、この特性も生かして、就学前の外来療育に力を入れていらっしゃいました。私が2年前に就任いたしまして、それを踏襲しながら、現在診療しております。



そこで一番感じますのは、やはりご家族のご負担の重さでございます。学園では現在、お話ししましたように就学前の療育、および今年度から特別支援教育制度になりましたので、以前から施行しておりますスタッフの学校訪問という形での、子供たちの学校における環境設定に力を入れております。こうしてお手伝いさせていただいて、ご家族の負担は、多少は軽くなるでしょうが、今後このライフステージに沿った支援に関して、誰が一番担っていくかということ、ご家族でいらっしゃいますので、私たちの力も微々たるものだと痛感しております。

これを解決するにはどうしたらいいか悩む日々でございますが、秩父学園の努力だけでは、やはり切り抜けていけない。地域の支援を提供する諸機関が連携していかないと、これができません。現在、この連携に必要な情報提供なり依頼なりを、ご家族が負担なさっているわけですから、少しでもこの仕事を諸機関で分担して、対応していかなければならないと思っています。

就学前、検診時の早期発見の際の保健所の対応、また就学前対応の中心になります保育所、幼稚園の対応、そして、それをまた学校につなげていく、こういうことを、すべて家族の方が今まで担ってきたということの事の重大さを、毎日実感しながら苦悩しております。

現在、発達診療所長としても、現国立秩父学園長としても、少なくとも所沢地域のこの連携に関しては、私なり、また組織としても努力していきたいと思っています。皆様のお知恵を借りながら、連携が深まりますようにと祈っております。ありがとうございました。

●深津：高木先生、ありがとうございました。

ではパネリストの方の中で、お互いにご質問等おありかと思うのですけれども、いかがでしょうか。どなたかにご質問、あるいは言い足りなかつたので時間があるならおっしゃりたいということ等あれば、お願いしたいと思います。

では日詰専門官、どうぞ。

●日詰：ショアさんと民田さんに質問です。私も厚生労働省に来る前は、長野県の精神保健福祉センターというところで、成人期の発達障害の方たちとのグループをやっていました。そのグループの中で、仲間が頑張るから自分も頑張ろうということを、何人か言ってくれるメンバーがいました。今日のような、就労とか、成人になって暮らしていくという

ときに、先ほどショアさんの紹介されていた本、『自閉症スペクトラム生き方ガイド』にしてもそうですし、民田さんの紹介してくれていた「きなっせ！九州」のお話でもそうですが、仲間の存在というのはかなり大事になってくるかなと思います。

その辺について、どういうふう仲間を見つけて、どういうふうその仲間と付き合いっていったらいいのか。我々は支援することとかと考えてしまうのですが、そういう仲間の存在というのは、実はとても大事だろうと思うのですけれども、その辺の見つけ方のコツですとか、長く仲間と一緒に過ごしていくためのコツみたいなことについて教えていただければありがたいと思います。お願いします。

●ショア：今のご質問なのですが、二つの答えがあります。まず一つは、友人の探し方というのは、ほかの人と変わらないと思います。まず、何かにかかわることによって友達はできます。自分の好きな活動に参加する、コンピュータが好きな人だったら、コンピュータクラブに参加すればいい、あるいは運動、スポーツが好きだったら、チームに参加すればいい、あるいはボランティアグループで、そういったスポーツにかかわっているところに参加すればいい。同じような興味を持った人は、同じところに集まります。そして自閉症スペクトラムでも同じことなのです。

ただ我々の場合には、少し極端だということなのです。自閉症の人というのは、社会的な集まりではなくて、活動ベースで集まった方がうまくいきます。従って、例えばコンピュータクラブに関心があるのであれば、あるいは水泳の好きな人の集まりとか。このように一緒に集まることによって、そしてこういった活動に出向くことによって、確率として人を探す、見つける、同じような考え方をする人を見つけることができる。そういう人が見つかったら友人になるということです。

もう一つのやり方としては、これも必要なことですが、いろいろな組織に参加するということです。その人達の状態に関連したところ。必ずしも障害とは限りません。従って、ほかの人でアスペルガー症候群を持った人、あるいは自閉症を持った人の組織とコンタクトするということです。

インターネットを使うことができると思います。簡単に世界中でやり取りができる。パキスタンにEメールを送るのも、隣の人に送るのも、同じように簡単です。もしその地域でグループがあったら、それに参加するというのもいいことだと思います。従って、物理的に、フェース・トゥー・フェースで、お互いに同じところに集まって、いろいろとや

ることができる。

あともう一つ、友人の作り方として、自閉症スペクトラムではない人と友人を作ることが重要なのです。すなわち仲間となってくれる人です。同盟してくれる人、そして必要であれば擁護してくれる、アドボケイトしてくれる、そして理解してくれる人です。自分にとって、何か職場で問題が、チャレンジが出てきたときに助けてくれる人、あるいはほかの社会的な状況で、ヘルプしてくれるような人を見つけるということも重要です。

この三つの分野でかかわることが、自閉症の人のための支援のネットワーク構築に大いに有効であると思います。

●深津：民田さんの方はいかがでしょうか。

●民田：私の方は、趣味としての集まりとかは、自分で行ったりはしていたのですが、今回自助グループということで話をさせていただきましたけれども、自助グループというのは限界がありまして、私たちのグループの雰囲気合う人と合わない人が当然います。合う人のグループであればいいのですが、合わなかったということであれば、そこは逆にいることがストレスになると思うので、いない方がいいとは思っています。

ただ、今、私たちのグループもそうなのですが、ほかのグループというのが存在しない状態という形に今なっていますので、複数のグループがあれば選択肢があつていいのですが、単独のグループでは受け皿の作りようがないのです。ですからもっと自助グループを作らないといけない。

ただし、先ほども話しましたが、入念な準備を重ねてやっていますので、どうやったらグループを運営できるかというところを勉強しないとイケないのです。

私の場合は、もう一人の人と二人で別の自助グループに参加していたものですから、どういうふうに運営していったらいいかというのは分かってやっています、何かトラブルがあつても、それはそれで一つの経験として飲み込んでいけるぐらいの経験があつたのです。ですからそれがないと厳しいと思います。

自助グループについておきますけれども、依存症の自助グループです。アルコール、ギャンブルなのですが、そちらに所属している人の、私が会った感じでは、7割程度の人に発達障害の傾向というのを見えています。ですので、中学生までの義務教育期間中に、依存症に対する防止教育というのは絶対に必要だと思います。

また依存症の自助グループの方に、回復という視点があつて、不適切な行動に関する戒めみたいなことがあるのですがけれども、発達障害者の中でも、やはり不適切な行動を行ってしまう人のためには、依存症の自助グループでやっているようなカリキュラムというのは、とても役立つのではないかと考えています。

ですから、まずグループを運営できるような仕組みというか、そこを手助けしてくれる支援というのは、絶対に必要ではないかと思ひますし、それは別に公的なものでなくても、ほかの自助グループをやっている人たちが、ボランティア的にやっても構わないと思ひますので、そのネットワーク作りができるような場の提供というのが必要ではないかと思ひます。実際にそれをやっている地域もありますので、取材されれば分かると思ひます。

●深津：ありがとうございます。ほかにご質問。日誌専門官、今の答えでよろしいですか。

●日誌：ありがとうございました。須田さんのところでも、仲間がいることで仕事を頑張る事例というのがちょっと出てきたかと思ひるので、須田さんにも追加でお願いします。

●須田：けやきの郷という自閉症が90%いる施設を、私は23年間経営しているのですが、最初はなかなかここで難しい問題をたくさん抱えていて、ほとんど大変な状態だったので。自閉症だけの50人の入所施設で、そういう中で、私たちは、実は全員が地域社会の中の企業に、指導員が自動車に乗せて連れていったわけです。そういう中で、自閉症の人たちが、社会の中で指導員と一緒に働くことによって、非常に指導員自身も成長しましたし、自閉症の人たちも、やはりそういう社会の中で、ある程度、働くというものはこういうものなのだということを、半分ぐらいは分かってくれたのだと思ひます。

それで、5年ぐらい経ってから全部引き上げて、それぞれ作業棟を作ったのですが、一番成功しているのが、先ほど言いましたように福祉工場なのです。それは、最初は本当に大変だったのです。なかなか仕事を外でやってきて、仕事はするのですがけれども、危険な仕事なものですから、大変な思いが指導員たちにあつたと思ひますけれども。やはりそういう中で、私も理屈では言えないのですがけれども、ナントカちゃんが仕事をしているから僕もするんだというような気持ちがすごく芽生えまして、その気持ちが生活の中にも出てきて、重い人たちを見て、重度の人たちを面倒を見ることによって、中度の人たちが成長して、重度の人たちが、中度や重度でも安定した人の姿を見て、発達していったのです。

また、余暇をすごく楽しむのです。本当にいろいろなところに行きまして、最初は温泉に行ってカラオケなどをすると、指導員がどうやって教えるかということだったのですが、最近では指導員たちを笑わせて、おかしくて、指導員たちがみんな子供たちのカラオケをする姿の成長を喜んで、帰ってきて親たちに教えるわけです。何ちゃんが誰かのまねをして、こういうふうに歌ったんだよと、本当に最重度の人たちは、みんなが踊り始めたら、みんなと一緒に踊り始めたよ。

そういうような、そういう環境の中で自然に、私は仲間として心が通じ合っただけで出てきたのではないかなと思いますし、月給をもらうことによって、すごいプライドが出てきました。月給というものを最初は知らなかったのですが、それをもらうことによって、みんなそれぞれが働くということに意義をすごく持ちますのと同時に、プライドを持っているのです。

それは何かと言いますと、たまたま自閉症だけの福祉工場というのは、世界でうちしかないです。自閉症だけでやっているというのは、20人の福祉工場なのですが、16人で働いているのですが、パレットを作って、去年の売上が1億2,000万円あったのです。それでみんな月給をもらって、親から一銭も仕送りしてもらわないで、障害者年金を貯めて生活しているわけなのです。

あれは私の夢のまた夢の、夢がまた実現したと。本当に驚異的なのですが、やはり自閉症の人だって、心と心が通じ合っただけで一緒になっていくと、見学者が来たときに、みんな一斉にあいさつに来るわけです。考えられますか。自閉症の子が飛んできて、「いらっしやい」と言っただけであいさつをする。しまいには、中国の人が来ると中国語で、英語を話す外国人がいらっしやると英語で、韓国の人が来ると「イナセヨ」と言ったりして、本当に和気あいあいとして、みんながあいさつに来る。考えられますか？皆さん。これはやはり働くことにプライドを持っている姿なのです。

それから、見学者が写真を撮るみんな撮っていきますけれども、写真を撮るときに、写真を撮ってもらえない人がいるわけです。例えば重い人で、ただ押さえて材木を運ぶだけの人がいるのですけれども、それが僕を撮ってくれと行動で表現し、写真を撮っている人を呼び出して、自分だって働いているのだという、そういう意気込みになる。そういう中で、仲間同士がつながってきたというふうに、私は思っております。

これはショアさんは見たことがありますけれども、そうですね。いらして、それを見ていただいて。だから自閉症の人は、絶対に重いとか軽いではなくて、あきらめてはいけ

ないのだと。自閉症同士が仲間同士になってゆくということなのです。

ただ、高機能の人たちというのは、アンケート調査でも本当に友達を欲しがっています。でもなかなか、1~2年は一緒に遊んでくれるけれども、友達がだんだん遠のいていくというのは、人間的なつながりがなかなかできない難しさがあるのではないかと思います。やはりそれは、小さいときから自閉症のかかえるいろいろな問題を克服していくことが、先ほど話したように大事なのではないかと私は思います。以上です。

●深津：須田さんの方からの、ドクター・ショアに何かお聞きになりたいことがあると、先ほど伺ったのですけれども、続けてどうぞ。

●須田：ショアさん、先ほど能力を見いだしていろいろする、それに合わせて就労させると言いましたけれども、能力の見いだせない人たちというのは、どうやって見いだしていらっしゃるのですか。

●ショア：非常にいい質問だと思います。十分に時間をかけてその人を観察すれば、何らかの強みは見つかると思います。特定の仕事に直接結びつくものでなくても、何かあるはずです。例えばうまく活用すれば、特定の仕事に結びつけられるような、何か工夫をすれば結びつけられるようなものが見つかるのではないかと思います。

例えばある子供、成人でもいいのですけれども、何かを並べるのが大好きな人がいます。そうすると積み木を取ってきて、床の上にどんどん並べていくという傾向が見られます。壁に当たったら90度曲がって、さらに並べていきます。その行動を見ているだけですと、あまり何も持っていないように見えます。しかしながら、もしかすると物を並べることが好きであるということ、しかも自閉症の人ですと、並べるにしても完ぺきに並べますので、それを活用して、例えば石ですとかレンガを、庭の境界線として並べるということではできないかというようなアプローチができると思います。自閉症の人たちは、何回も同じことを繰り返して、それを楽しみとしている。そこから何か見いだしていくと、対応できると思います。

●深津：先ほどドクター・ショアの中にありました、水浸しにしてしまわれる方のお水の水圧がということで、その方について、けやきの阿部さんのほうから、ドクター・ショア

に何かコメントがおありということを知っていますので、阿部さんのほうからどうぞ。

●阿部：けやきの郷の阿部と申します。親の立場から、ちょっとショアさんにコメントと  
いいますか、私の経験を話させていただければと思います。

うちの子どもは今45歳です。須田さんがさっきからおっしゃっていました、最重度の中  
の一番の、チャンピオンの一人です。当時は、まだ義務教育が障害児には適用されてい  
なかったため、ほとんど公的教育は受けておりません。親が中心になって、先輩の意見、ア  
ドバイスを受けながら、自分で工夫して、子どもから学んでということが、子どもに対す  
る療育の中心でした。そういう意味では、ショアさんのご両親と同じようなことをやって  
きたかなと、実は思っております。

私の子どもも、水遊びが大好きでした。私は、そのとき彼は水圧を感じてそれを楽しん  
でいるなということ、十分分かっていたのですが、なにしろ私のうちは当時団地の2階  
ですから、水浸しになったら下のうちが大変なことになりますので、どうして止めたらい  
いかをすごく悩んでいました。

それから、うちの子どもはものすごい多動と申しますか、うろちょろうろちょろしてい  
まして、私が横を向いただけでもどこかに行ってしまう。行方が分からなくなってしまう  
子どもでした。そのために、夕飯の準備とか食事の準備ができないわけです。この二つを  
どうしたらいいかなと思って、まだ自閉症という言葉が、本当に専門家もよく分からない  
時代だったのですが、とにかく水が好きなのだから、台所仕事を一緒にやってみようでは  
ないかということが、きっかけでした。

まずは、大根、じゃがいもなど野菜の水洗い。次いでお茶碗洗いということをはじめたの  
です。ところが本当に最重度ですので、どうやってお茶碗を洗っていいかわからない。私  
は点人間と前からいっていたのですが、お茶碗洗いという一つの作業を、線としてつなげ  
て考えることができない。そのために、私は子どもの行動を10ぐらいに分析して、一つ  
一つを手を取って教えてきました。

例えば水道の蛇口を開いて、お水が一杯になったら止めて、スポンジを取ってとか、そ  
ういうふうに10ぐらいに分析してやったのです。それらを一つ一つ手を取らないで、全部  
一人で、線としてつながるようになるまで、2年ぐらいかかりました。始まったのは5歳  
の後半ぐらいだと思います。

でも、その途中思ったことは、一つは須田さんもさっきおっしゃいましたけれども、私

との信頼関係が付いていったということなのです。これは、初めから信頼関係を付けようとしてやったことではなく、結果としてそうなったということに、気がついたのですが、子育ての中で一番重要と私が考えている信頼関係が付くようになりました。

信頼関係が付いたというのは、具体的にどういうことかという、お母さんの言うことなら、ちょっと我慢してみようとか、あっちへ行きたいのだけれども、「そっちへ行かないでね」と言われると、本当は行きたいのだけれども、ちょっと我慢してみようかというふうな、お母さんの言うことならちょっと言うことを聞いてやるか、みたいな感じが付いていったということです。そうすると、それから結構生活の面や、いわゆる社会性というものにつながってくるのですね。

そして、お茶碗洗いから始まって、洗濯、さっき吉野先生に見せていただきましたけれども、洗濯とかお掃除とか、そういうものもできるようになっていきました。

そして、その中でもう一つ分かったのは、その中で子どもは、やはり自分の仕事ができるようになったということで、プライドを持ってきたということです。これは自分の仕事なのだ。そうすると、自閉症の特徴である固執性がすごく有利に働きます。これが自分の仕事として、うちの中での暮らし方というのが、かなり楽になってきました。

ところがもう一つ、すごく困ったことは、本当に最重度ですから、般化していかないのです。私とはそういう関係が付いた。でもほかの人とは付かないのです。吉野先生がさっきおっしゃっていましたが、幼児からの教育機関とか療育機関との、家族との協働体制、情報の共有、そういうものができていればいいのですが、それが全くない時代でしたから、ものすごく悩みました。

それがやっとならざるようになったのが、実はけやきの郷なのです。けやきの郷は、反対運動があつて無認可施設というのを3年やったのですが、無認可施設に入ったのは、18歳でした。そのときに担当制を敷いたのですが、情報を共有し、私はこういうやり方でやったので、ではこういうふうにやってみようかというようにしました。けやきの郷が、初雁の家という更生施設を開設してからは、パレット工場にも行きまして、うちの子もパレット工場の一員になりました。

そこで職員が、3カ月かかって釘抜きを教えてくれ、一人でできるようになったのです。私はまだまだできるわけないと思っていたのですが、できるようになったのです。職員の労力は並大抵のものではなかったと思いますが、それをきっかけに、その職員に対しての関係がついていきました。そして、その一人の職員に対しての信頼関係につながっていつ



たと思ったら、ば一っとほかの職員、ならびにほかの自閉症の仲間に対しても、この人の言うことならちょっと我慢してやるよ、みたいな感じができていったのです。本当にびっくりしました。

私は就労と言うと一般の企業に行っ、個人が単独で仕事をするというイメージを持ちます。私はその基本となる、働くということをちょっと考えたいのですが、やはり大人になると、働くということ、そして余暇を楽しむ、自分の時間を持つということが、基本的な条件だと思うのですが、私の子どもの場合、大人として働くことが、彼なりに満たされてきたのだと思うのです。

今、福祉工場の中で、本当に最重度なのですけれども、木を切ったり、その木を運んだり、マーキングという仕事をしたり、釘抜きの仕事をしたりして、それなりに本当にプライドを持ってやっているのです。それでそれは生活にも、ある意味リハビリというのにもつながると思うのですけれども、生活のほうも変わってきました。10歳までは、怒ったりすると、ワーンと泣き叫んでほった叩きとか、他人にガブツとかみつくとか、があったのですが、今は、自分の好きなCDを聞いたり、おもちゃで遊んだりということで、職員仲間に支えられながらそこまで発達してきたと思います。

ですから、やはりまず初めの信頼関係を作るということは、親かもしれない。だけどその次にそういう支援者がいる、そして仲間がいる。そういう三位一体の中で、そういう仕事ができているというふうに私は思っています。

私は、これは行政の方をお願いしたいのですけれども、今ジョブコーチ制度があります。けやきの郷は1985年から、アメリカでジョブコーチ制が始まる1年前からやっていたわけなのです。それで、これを一般就労だけでなく、TEACCHがやっているように、モバイルクルーみたいなグループ就労にまで、そういうジョブコーチ制度というのを広げていただけたら、重度の自閉症の人でも、社会的貢献を立派に果たしていけるのではないかと。そして彼らとしても人生の満足度、豊かさというのを満喫していけるのではないかと考えておりますので、ぜひこれも含めて行政の方をお願いしたいと思います。

ショアさんから刺激されて、私の思いとお願いを申し上げました。どうもありがとうございました。よろしく申し上げます。

●深津：ありがとうございました。ドクター・ショアの先ほどの水圧を、このお方も、職業の一つに皿洗いとかも入るかもしれません。

今のコメントで、市川専門官の方、何かコメントはありますか。

●市川：まず一つ、今のお話はとても重要で、職業カウンセラーとしての経験から感じたことで、「働く」ということは、企業で雇用契約を結んで働くというステージもありますが、日常生活の延長線上に「働く」ということがあるのだということを、特別支援学校でガイダンスをしに行ったときによくお話しさせていただいていることなのです。

例えば今の茶碗洗いのことについても、今やファミレスの厨房の食器洗浄機のところは、特別支援学校の職場実習の定番ですし、大体都内であると、ファミレスに一人は知的障害の人が働いているという状態にまでなっている。日常生活の経験の積み重ねの延長線上に就職が見えてくるという、とても重要なことである、ということについて、雇用の側からも訴えたいなということを感じました。

それから、ジョブコーチについては、我々が担当するのは、やはり雇用の分野ですので、一般就労を目指す上でのジョブコーチ支援ということになります。ただ、福祉から就労へという大命題が今ございます。その中で、社会福祉法人等のスタッフの方が、ジョブコーチの資格を取って、そこから一般企業を目指す就労チャレンジのときに、本人のことをよく知っているジョブコーチが頑張るといような仕組み作りもしています。

あと、今、自立支援法の中で、サービス管理責任者の研修会とか就労支援の部分を中心に強化されていて、その中で出てきているのは、ジョブコーチ的手法についての研修も、かなり強化されています。ジョブコーチというのは名称独占でも何でもなくて、手法という考え方からすると、そのような発想をもって学んだ福祉施設のスタッフの方がいることによって、施設内の作業についても、倍増ではないですけども、より稼げる仕事になるようになってとか、そういう取り組みがされるようになるのだらうと思いますし、どんどんすそ野は広がっていくと思います。

それからグループ就労という形態については、特に我々の中で今考えているのは、統合失調症系の方々が、グループで職場に行って仕事を進めることによって、それこそお互いに支え合うということも含めて、体調を維持しながらいい仕事ができるというようなことが実際にありますので、そういうものの制度化という意味で、一部制度化されているものもありますが、より使いやすいものということの研究は、今続けているところでございます。雇用の分野というところからは、ちょっとそのようなことで、情報提供をさせていただきます。

●深津：ありがとうございました。では時間が迫っておりますので、会場の皆様からのご質問、ご意見を、お受けしたいと思えます。係の者がマイクを持って伺いますので、どうぞご質問、ご意見のある方は、挙手をお願いいたします。いろいろな分野のパネリストがいらっしゃいますので。

一番前の方、どうぞ、お願いします。

●村上：今日は大変有意義なセミナーでございました。所沢市手をつなぐ親の会の村上です。あと知的障害者のサッカーチーム SC 所沢をやっております。その国リハ学院さんのところにも、うちのチームの案内をまだ張っていただいております。ありがとうございます。

私の方の経験で言うと、就労に関しては特例子会社というのが最近だいぶ注目されております。

先日、神奈川のファンケルスマイルという会社の社長を招いて、所沢で講演会をしたり、もしくは会社見学に行ったりしたのですが、この会社には、いろいろな障害の方が30数名いるのです。受付にショップがあるのですが、そこにいらっしゃる女性の方は、最初に行くと、名前と生年月日をまず皆さんに聞いている。2番目に行くと、必ず覚えていて、誰々さんこんにちはと、もしくは誕生日がその日の前後だとすると、「誕生日おめでとうございます」とまで言ってくれるそうです。その子も実際、ほとんどしゃべらなかった子らしいのですけれども、急に言葉が出てきたと、聞いています。

先ほどの名前と生年月日という件は、外国でもやはりそういうものはあるのかなと思って、ショアさんにちょっとお聞きしたかったのですが。

●北村：ショアさん、質問をお聞きいただけましたでしょうか。外国でも名前と生年月日を覚える、受付のような、そういうお仕事をされている方がいらっしゃるかというご質問です。

●ショア：アメリカでそういうことをやっている人は、いるとは思いますが、私自身はそういう方に会ったことがありません。確かに社会的な相互作用という意味では、非常に雇用につながるいい道筋だと思います。例えば非常に、それだけ記憶力がいいのであれば、ほかにももしかすると使える分野があるのではないかと考えてみることも有用だと思います。例えば誕生日だけではなくて、前回来たときには何を着ていたかとか、例え

ば「前回いらしたときは、本当に美しい青いコートを着ていましたね」などの会話ができるのではないかと思います。それは非常にいい一歩になるのではないかと思います。

●北村：ありがとうございます。ほかにどなたかいらっしゃいませんか。一番前の方、よろしいでしょうか。左側の一番前の。

●黒岩：埼玉県新座市に住んでおります、ADHD 当事者の黒岩秀行と申します。

須田先生がおっしゃっていたと思うのですけれども、高機能自閉症の方は、若いときに発見されない、ケアを受けなかったことが多いので、成人してから就労したときに、不適應になって、会社をクビになるようなケースもあるとおっしゃっていたと思うのですけれども、それは民田さんもおっしゃっていましたけれども、ADHD の方にも共通していると思います。

子供のころに訓練を受けなかった高機能自閉症の方や ADHD の方が、仕事において適応していく、あるいは能力を発揮していくためには、どういう自助努力、あるいはどういう周囲のケアというのが必要だとお考えになるのでしょうか。どなたにお聞きしていいのかわからないのですけれども、須田先生にお答えいただければありがたいのですけれども。

●北村：須田さんからお願いできますでしょうか。またほかにもご意見がある方は、続けてお願いします。

●須田：実はアンケートの中で、結局、最後の先生の診断の話が出ましたけれども、親が受けようとしません。それで問題が起きるのが中学、特に IQ の高い方たちは、中学ごろに家庭の中ですごく暴れ回ったり、いろいろな異常が出てきて、初めて親がおかしいと思って病院へ連れていくのです。ですから、すごく遅いために、いろいろなことが、性格的にもある程度固まったというとおかしいのですけれども、その子なりの納得のいく生活で終わってしまっているわけです。ですから非常に難しいのです。

アンケート調査の中で、小さいときからすごく異常があつて、それで6歳ごろに言葉が出て、知的に割合に高いものがあつたお子さんの場合には、割合に状態がいいのです。それを見ると、やはり診断を早くにしなければいけないのですけれども、親御さんの心構えがそこまで認められないということが、非常に大きな問題だと私は思っています。できる

だけ早くに分かるということが、一番就労につながる重要な問題です。

それから親御さんたちは、やはり能力に希望を懸けてしまっているのです。例えば算数がすごくできて、国語が全然だめだから、数学だけやっているのではいけないから、国語をやらせようと思って、一生懸命そこを頑張らせてしまうわけです。そうすると、人間的に耐えられなくなってしまって、それでいろいろな問題が起きてくる。ですからいいものも持っていながら、それがうまくいかないのは、全くそのときの生活のあり方です。かかわってきた生活のあり方が、やはりその子を混乱させているのではないかなと私は思いますので、できるだけ早くに、ぜひ専門の先生たちに、早く親が行くように。

幼稚園にいたときには、多分分かると思うのです。そのアンケートでは、高機能の人もアスペルガー症候群の人も、みんな異常を持っていて、言葉も割合に発達が普通の子供より後れているのですけれども、アスペルガー症候群の方は、ほとんど入学するときには言葉が正常に出ているのです。でも高機能の人たちは、出ているも本当に単語と、それから「てにをは」が入るとか、しゃべっていても限定された言葉しか出ていないのです。ですからそういう意味で、高機能とアスペルガーは、そのところでも違うのだなということは、私はそのアンケートで感じております。

いずれにしても、両方の親がやはり認めたがらないというのは、やはり特別な能力を持っていて、ついていくというところにあるのだと思います。私たちみたいに最初から知的に後れていると、ゼロ以下から始まって、一つずつ生活していく中で発達していくと、喜びを感じますけれども、そういう方たちは途中からなるので、親御さんのショックがすごく大きいのです。親の気持ちというのは、非常に子供に響きます。ですからそういう意味で、親御さんの支援というものが、すごくその時期に大事になるのではないかと私は思います。

●ショア：須田さん、阿部さん、伺っていますと、どうやら成功の鍵となるのは、自閉症の子供あるいはその他の障害がある場合、うちの親もそうでしたが、親御さんが受け入れるということだと思います。その子を全体としてこういう子だということを受け止めるということと同時に、多くの場合には、かなりいろいろと克服しなくてはいけないということとを認識することが必要だと思います。生産的な人生にするためにはです。

自閉症の、そしてADHDの特徴に焦点を当てて、どのような問題でもいいのですけれども、それに価値を付けてはいけないということなのです。いいとか悪いとか価値判断をし

ない。そのまま受け止めるということが重要だと思います。そうすれば方法が見つかると思います。自閉症の当事者の強さが分かってくる、そしてこのチャレンジに立ち向かっていくと、対応ができる、そして非常に生産的な生活を送ることができるようになると思います。

●民田：すみません、私のほうからちょっとお話しさせていただきたいのですが。先ほど ADHD というふうにおっしゃいましたけれども、私のプロフィールにもありますように、昔 ADHD で、今アスペルガーと診断されているのです。これはアスペルガーと自分では気づいていたのですが、この資格を取ったからには、アスペルガーと未診断のまま名乗るわけにはいかないの、あえて取ったというのもあるのですが。

実際にアスペルガーをきちんと診断できる医師のところ、改めて診断してもらって、コミュニケーション障害がある人は、大抵アスペルガーというふう診断が変わると思うのです。ですから ADHD という診断名に固執するのではなくて、アスペルガーという可能性も踏まえて、きちんと診断できる医師、成人に関してはとても少ないのですが、そこに行くことは重要だと思います。

それと、感覚過敏というのがある人もかなりいて、そういう人については、可能性も含めて、感覚検査というのを、感覚統合学会とかでやっていただけることもありますので、私も縁あって、去年させていただきましたので、そういうのを検査してくれる人たちを増やすのも、やはり個人が実際に就労の場でどんな困難が待ち受けているかを予測することになりますので、必要ではないかと思います。以上です。

●深津：市川専門官、よろしいですか。吉野先生。

●吉野：一つだけ追加させてください。今日ここに教育の専門家がいないので、ちょっと片手落ちかなと思うのですが、結構教育には文句が行っているの、私に言わせてください。

要するに、アスペルガーとか高機能群の軽度発達障害の人たちの診断というのは、僕らは人権の擁護だと思うのです。つまりより良い人生を生きていただくには、その人の特徴をよく理解してください。そういうものがよく分かれば、より良く生きて、通常の古典的な障害の人とは少し違う人生を送れる可能性があるの、なるべくその人の個性としての

特徴をよく理解してくださいということが一番言いたくて、アスペルガーとかいろいろな診断をするのです。

もう一つ問題は、せっかくそういう診断が付いても、日本では、いわゆるソーシャルスキルの教育とか、あるいは問題解決能力とか、こういうことを学校で十分教える先生は、まだ鐘や太鼓で探さなければいけないぐらい少ないのです。

やはり通級の学級に行っても、算数を分かりやすくとか、書き取りを上手になるといった教科支援や、簡単なあいさつのしかたといった指導です。人間同士がどういうふうにつき合っていたらいいとか、会話はどういうふうにしていったらいいか、話題はいつ変えたらいいのか、さらには常識というものを、小学校1年から高校を卒業するまで、プログラムをきちんと考えて育てていこうかという、こういうソーシャルスキルの教育がなくて、さらには、1年ぽっきりとか2年ぽっきりで、担任がころころ変わっていったり、あるいは教育方針が変わったりという中で、日本ではアスペルガーの人たちは、悩み苦しむのです。

例えば今失業した状態で、初診で来られる方がしばしばいますけれど、やはりコミュニケーションが下手すぎるとか、常識がなさすぎるという形でクビになっているのです。そういう事態になる以前になるべく早く応援したいなと考えますが、学校は医学的な診断が付いていない人はやってはいけないと思っておられるので、やらないのです。

もう一つ、日本でぜひ欲しいのは、医学診断という言葉と教育診断というのは違うのだという考えです。加我先生がおっしゃったように、本当に医学診断は、必要なときに付けるということでもいいと思うのですけれども、いろいろな行動特徴だとか、あるいは傾向から考えて、この人にはこういう教育的な追加をしてあげることが望ましいという段階で、それができるような教育制度を考えていくべきだと思います。それから病名を怖がる親御さんは一切受け入れられない、あるいはそういう診断能力がない地域のお子さんはずっと病名が変わらないままとか、そんなことも随分起こっていますので、改めて教育的診断というところからも考えていく宿題があるように思っています。

そういうところが特別支援という名前になって、ぜひ変わってほしいなと願っています。以上です。

●深津：ありがとうございます。加我先生からも、早期診断からかかわれる貴重な医師として、また30年のキャリアの中でのご経験を伺えますでしょうか。

●加我：先ほど、早く診断すればいいというものではないと申し上げたのですけれども、基本的にはやはり早く診断をした方がいいと思っています。ただ、それをどうお伝えするかということ考えたときに、こういう特徴を持ったお子さんです、あるいはこういう特徴を持った方ですということをお伝えしていく中で、医学的な診断も受け入れる条件が整っていくということもあると思います。

ですので、何々病という診断を付けることだけが診断ではないと思います。場合によっては学校なり社会なりで支援を受けていただきやすくするために、あえて病名診断をすることもあります。それ以上に、その方の性質や特徴をお伝えすることが大切だと思いますので、この点をお伝えすることは積極的にやっております。学校なり社会なりが、その方たちへの対応を考える場になっていくような環境を育てていくことが、ぜひ必要であり、願っているところです。

●深津：どうもありがとうございました。まだたくさんご質問、コメントがあるかと思いますが、時間もまいりました。これにてパネルディスカッションを終了いたします。



## 閉会挨拶

江藤 文夫

国立身体障害者リハビリテーションセンター 更生訓練所長

国立身体障害者リハビリテーションセンター、更生訓練所長の江藤でございます。本日は、WHO 指定研究協力センターの活動の一環といたしまして、発達障害の理解と就労支援に向けてセミナーを企画いたしましたところ、大勢の皆様にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

基調講演といたしましては、スティーブン・ショア氏から、自閉症の当事者として、ご自分の経験と、それから雇用で成功のために大切な事柄を幾つも挙げていただいて、そして興味への情熱を持ち続けて、熱く語っていただきました。本当にありがとうございます。

引き続いてのパネリストの皆様には、非常に限られた時間でのプレゼンテーションで、しかも討議の時間も短くて、またフロアからの皆様も、まだまだご質問があったかと思えますけれども、限られた時間ということで、各パネリストの方々には、厳密に時間を守っていただきまして、会の進行へご協力ありがとうございました。

また日曜日の午後、お集まりいただいたフロアの皆様、活発な質疑討論をしていただきまして、本当に時間が足りなくて残念ですが、またこういった機会を持っていきたいと考えております。

発達障害という言葉は、生まれてから成人に至るまで、社会の一員として活動し、さまざまな場面に参加して、自立した生活を送るスキルを身に付けていく過程での、困難を持った場合、そういった方々ととらえられるかと思えます。従いまして、運動面や精神面の多様な障害が含まれますが、自閉症や、あるいは学習障害といった、精神面での障害につきましては、外見が目立たないことから、リハビリテーションの取り組みが非常に質的にも量的にも後れております。

そこで、本日行政の方々からもお話がございましたけれども、自閉症や広汎性発達障害を対象とした、発達障害者支援法が施行されたわけでございます。私どものセンターも、高次脳機能障害などの取り組みに、近年は積極的にかかわってまいりました。自立支援法で、3 障害を同一に扱うというような趣旨もはっきりと打ち出されておりますことから、今年後半ぐらいには、私どもも身体障害者という縛りを外して、国立障害者リハビリテ

ションセンターという方向で活動を展開することを予定しております。

この発達障害につきましても、私どもセンターの重要な課題と認識して、生活自立や就労に向けた支援に、積極的に取り組んでまいりたいと思います。

こういったリハビリテーションでは、障害を持った当事者の皆様のニーズに応じた支援サービスの提供が求められます。そこでは当事者の皆様の体験を通して、問題点を把握し、障害を理解することが大切であります。そういった意味から、本日のセミナーの成果は、非常に私どもにとっては大きなものであったと思います。これを機会に、私どもも発達障害を持つ人々の生活自立支援、あるいは就労支援のために、技術開発と情報の普及に積極的に努めてまいりたいと考えております。

本日は、長時間にわたり、このセミナーに参加していただきまして、本当にありがとうございました。これをもって私の閉会のあいさつとさせていただきます。